

壬戌漫錄

七

塔之記

大正五年十月廿院起筆

特別
14
1919
348



壬戌漫録七

大正十一年十一月一日起筆



○京都の印人園山大迂跋後七年一を経過す、其嗣
 子懐一其の七冊を乞ふにんし（正月三日）松状を
 寄せ来す、此集木印画詩各一冊、余大迂と四角
 り嘗ては訪問の日、自畫一枚を贈る、六余の
 名に香筒に篆字を刻し贈る、唯此生荷印
 の篆刻を托せりし、今に松七遺紙とす、幸に
 故半迂の遺物皆余に歸し、其内荒干大迂の
 刻あり、六五六顆大迂篆卷の印あり、以て是なり

とすし、今定書るる集を記する画法あるに在
也人物花卉と曰初めに見るを皆まじふし、画を
張子祥、字ふとまふ、詩も此集に就て初めに見る
篇に皆請ふし、

○例より圖表を造りたの體をも得

瀛舟筆法 六冊

香虫六行 十一冊

硯の翠木 一冊

四和書目 三冊

中士根源記 一冊

皆を採るるありとせんとも六架中、存する、送る、
瀛舟筆法を嘉慶年間阮元の中、兄の遺書を

編輯したるものあり、及歴あり、詩文あり金石の攷証
あり、逸書を輯のなるもの、如くまを阮元を知り、一助
り、阮元の史歴を見たり、嘉慶年間浙江の巡撫
たりし阮歴あり、嘗てと梅亦を阮子の曰四年に傷
らるる送書を授り解題をせり、ことあり、本出之
れを収む、元、金石の大家、言、こと言のやも、ちし
積古書を即ち其の珍秘をの尋、其を置き、
所、鐘鼎に關する著る人皆之れを知り、彼れを阮元
に就て、ち多々の著るあり、阮元前人の門徑に據ら
ず、かゝる創見あり

香書六行

香書六行の卷三 香志一香道 時代は秋四
香道 秋の卷二 輿の表のり 二十 香の記一

夏俣年間大波の大枝流芳著す所を世上に離れく
流布するも也。えん箱と纏中うそのも此人の
秀道の色に流の松軒の玉衣著ありて未だ定傳
といふを得ず。唯此初掲本の刻合に出入手紙を
きいませぬし

田相の目 三冊

策中一書又元禄著の色田をいふ此を目と得る能
いさうしこと久し。いんり本相現在ある目と著獲と
一と原貞持の増補する不也。今と容易に獲
難く價高の不慮也

碇の碁

此は碇石の研究：没記しるものありしに碇石

後碇石叢書と其大なるものし。余石叢書に而後
あの名未だ碇石を記す所此をいふ人今其著
すに碇石の大略を掲げしものし。寧ろ略に
其すんも續て碇を感するものあり。碇石
石の分布圖一枚を添ふ

市士根元記 一冊

一名田鎮記といふ田鎮の著也。市士の名
すんも購ひ得るを初め也。今ある市士の名
を以て稱するものも其來各地に多く播指すんば
十數に下らぬ。或る形骸の市鎮に似たるを
以て或る市鎮の中の一の市士と云ふ所を以て市
士の名を以て呼ぶものも一歴考を以て証す

○茲村真治位成後改、八ヶ月に亙り一通忌迄
に其の遺稿を刻するの約あり、追々如過并時未稿
本の整理に着手し不日印刷に回らんとする、茲村
存世中、寸珍本に刻せんとするの意あり、体部も
其の遺志に従はんとする、上冊を文集を収め下冊を
紀行集に師友録を収める體也、校閲中感ず
る其の遺文と余の家系に親戚に關するもの
其六分を占む、此も吾家史と云らんも差支る
きり似たり、巻尾茲村の履歴を叙し、後三代の
の要あり、近の稿を自試みる、
○支那人が主として贈答用と云ふ研が、何んの意をも
知んぬものあり、日本、七ボウノ来り、自人も或る

七ボウの如き、
の意近、
出つて今も一石七無つ、
硯を美くつ、
面、
石の斑の
以の七ある、
是地を
石の福
り、
そ、
又

後者青斑の紫石にあるものを激漢石と云ふ。この石は
 湖南省洞危の西方に出づ。砥状に磨る硬石の膏
 い石と云ふ石も、淡墨と云ふ石も、皆此石を
 板状を穿して比較的大ききもの取れるもの大硯が作ら
 るる。又その層の紫緑石を淡黄の石と云ふ。硯石と
 墨石と云ふ石を利川と云ふ石の硯石と刻する
 便あり。硯屏を以て知るべし。輸入するもの
 吾等の目に觸れるもの乃ち此石と云ふと知れ
 ○京都の河工尾石を以て種々の硯石と云ふ。其硯
 石は石の石も、硯石と云ふ石も、皆此石と云ふ
 木米が耳よりして河工の硯石と云ふ。硯石と云ふ
 傷液を穿する。硯石の石も、皆此石と云ふ。

あつたことと云ふ。硯石、ア、硯石と云ふ。硯石
 に耳を以てするもの。出来らうの石と云ふ。硯石
 文法硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石
 が石の石も、硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石
 ケーゲルと云ふ。硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石
 木米の子孫と云ふ。木米の京都下鴨野の硯石
 を硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石
 きで硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石
 一、道ハ清凡と云ふ。硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石
 る。硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石
 ちと云ふ。硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石
 木米の河工と云ふ。硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石と云ふ。硯石

法を尋び能く康物をうつけしに京都大里所
五條ある今の茶屋の所う其位宅びより
墓中連在寺の格電れ者が京都醒ヶ井三條
のあきら院にあつて 碑文不詳る跡を下三巻
堀河に伝へたることこのまじしに

○釣のむと減多にふいふを何羨候釣客侍が
この二巻を何のの強強に令敷しを強強を一冊の
しとあるの自分の強強に令敷しを強強を一冊の
手を入らぬ、この又園の明りともふ天的年方、
刑に違つべうの一巻にあり、このも強強のまじし
びの河合を強強に強強に得た大体を釣りのまじし

悉くふしとむのむあふ、ふと首を物道具を
のれとむとつ三下軒不と載つてあり、この一
巻をあるとつと物道具下の如く葉平川、この
横の輪廊の圓入に中のののまじし、このま
公儀の御坊本とまじしある所、八月とつと御
の三月まじしと法しとある所の物道の給と垂
る、このの出来あるとつと初心のまじしは
初心のまじしとつとつとつとつとつとつと
ある、この御坊本とつとつとつとつとつと
○制限を受けるは、この御坊本とつとつとつと
この御坊本、此の御坊本、この御坊本、この御坊
本、この御坊本、この御坊本、この御坊本、この御坊

○自分の家の玄園の背に風波のよみ松を一株あ
つて玄園深しとありてある。その姿なりと鉢植
の松とちりてふきものをあま、いつてもは内道も
初めを訪ひ来り。此の松を見せ、玄園の元を無地白
木の四枚としら、此松ういどくを挿ししよら
うとあら、道邊を能くをさと聯想してう
ふたのむあふ、如何にも能くをさの背に松を
うら松こも似てある、このつき此松能く
さの松と、うら松と、うら松と、うら松と、
せんを、飯う意味のある、このも思ひする、因
能く、久しく形式とあり、枝、何重とある、其數
を、階級と區別する、何重と、公儀、自の能

の松を、用ひてある、墨徳むあり、このもあ
ハ、松式がある、ぬき、根無うあり、つてある、根
を左方へ振え、幹をたらし、左に曲くする、例とな
つてある、そのまき、方に、は、あ、あ、あ、の、所、ま、か、あ
うら、うら、い、か、活、動、演、技、の、背、に、松、あ、り、あ、ら、あ、ら、あ、ら、
活、動、的、な、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、
こ、う、こ、う、こ、う、こ、う、こ、う、こ、う、こ、う、こ、う、こ、う、こ、う、こ、う、
ふ、は、あ、り、こ、う、こ、う、こ、う、こ、う、こ、う、こ、う、こ、う、こ、う、
あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、
或、本、の、植、え、る、こ、う、形、式、と、あ、り、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、
の、後、と、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、

遠くより官漢に送中して盛出し人目に入り、寺の存在
を後世のものと此の塔がある、日本の如き樹木の多い國
てと塔の附して多くのを樹がある、遠くより見ると
樹石より又ト互互してある風、改むらうも美
ひある、塔を各部の土木造む、亦其他の形を毛の
あるより、縁附の間、其の盛上するさま、何と
七やく四趣とありてあり、或る意味、さういふお寺の
唐風の扱ふものがある、唐風と云ふと、お寺の
お寺の禁と云ふ方、穩うがある、お寺の本
は漢の意義を譯するも、これら崇拝の標目であ
ると云ひ、お寺、日寺の、旗幟の扱ふもの、ある
まゝ、遠くより七仰き見え、一種山宗高の感を

此のよま七法して謂ひのまゝのことである、佛教が
進んて、兼て、お寺の、唯此寺の、崇飾に
て、まゝ、扱ふ、取扱はれ、あるが、その中に、舍利
の納まりて、あり、聖靈の祀え、ある所と考へ
て、思ふと、佛教の盛時、これら、少く、崇飾を受け
た、その、思想、に、餘り、ある、譯、に、其の、結構
に、工人、の、直る、き、身を、盡し、た、七法、して、無理、を、な
す、お寺、の、敬の、念、を、ある、も、尚、は、建築、美術、の、範
に、お寺、の、尊敬、を、受、けて、ある、もの、偶、然、に、ある、の、邊
に、見、ん、べ、い、の、塔、も、似、たり、空、の、う、ら、む、目、につ、く、の、を
信、の、教、の、う、ら、む、く、ひ、ある、こと、大、木、が、区、々、ひ、ある、こと
ある、い、である、扱、ひ、が、實、を、ま、ん、ま、單、純、な、お、寺、を、

無い年代より種々のおもむきがあるものと見ても、種々の目的
代々の構造の形式は著しく違つてゐる。菊池定春
二師事一に流石な者亭子が、又の修業時代三谷宗
三伴元七谷中の天王寺に到り、唯電後塔の某
傍に就て質問を受け、有亭も是をよむことこの
出来おし、注ぎを以て詠七ある位で、相違に注ぎを
ある眼を以て見ると見逃し難い特徴があるの
である。如何なる純眼でも善悪なる形式と違つてゐ
ることの如く、**薬師寺**の東塔にあらう
これ五三重の塔であるが、各層の間中二階の
板を以てあらうと見れば、此の中二階
の板を七のと、**震**格といふが、**えん**あるはもと三層

ら二重に見ても、以上のよう種々細々あるが、**法興寺**
かゝる注ぎを以て、**果**因の如く、この**法興寺**
寺の五重塔である、その屋根の及り、**五重塔**
のものと及ぶが、**外及**(コンケイブ)の
の曲線であるの、**内及**(コンケイブ)である
る、**前**は最下の基、**板**よりなるものである、**法興寺**
屋根の割合は、**五重塔**に大きいといふ
特徴のがあること、**前**下の**中**の**先**の**割合**に大きいといふ
ることを見ると、**前**下の**中**の**先**の**割合**に大きいといふ
地のは、**平**べつにあらうと見ても、**法興寺**の
を以て、**五重塔**の目の上に**法興寺**を以て、**法興寺**
あり、**五重塔**の**屋根**の**重**なる**法興寺**、**全体**なるい

塔の建造に用意のある所を根元と重なり見くろむ所
あるのは、法隆寺の五重塔の優美も上層の根元
を以て較ぶると、さういふ所下の基盤とも見くろむべき
割合は廣く、さういふ所下の基盤とも見くろむべき
六角の輕げな見くろむ、さういふ所に、特徴の
美びであるのは、後世の塔を上層の最下層も若
しいもの大ききもの、ついで、塔の何と
く、視ることも不安の感をも、あるが、何と感
を興へることも、宗廟上の造物に、最も、忘れられ
たのである、真言天台の佛あり、東漸して、
重きと、變塔の、さういふ、塔の、
無きとも、いふ、塔の、
十二

さういふ、塔の、さういふ、塔の、
無きとも、いふ、塔の、
十二

高きも塔のちとと鉤合ら甘く取らると取らぬとを在
心と凡心とを判る此の形相に就ては形式の甚帯く
あつたのちある、そんちを先張前にてそのに實生寺
の塔心ある、乃ち形相の絶頂に傘形のことのあつ
てそんを承けて徳利柄ちとのつある、そんちを印
の形式に據つたものと云ふことある、本邦に他
に餘り例を見ない、何んとも天竺よりあるもの
に多し研究家もさうせんハ一寸驚かすつ、ぬが、前
寺の東塔のお塔の絶頂に蓮の葉のあつて
その下より世に飾りて天人の抱擁と舎人親王の
銘う刺んであること、名物もある、塔の内部
にむつとある、後絶ちあるかむつ大切なるものと

その中心とさうしてある柱に、此の柱が塔全体を支へる
と共に別に重大な意味がある、元鳥朝あつたの塔
の柱をぬぐふと、その重大な意味を存してある、そんを
河のほとり、と柱の下に石礎がある、その中に舎
利の納めがある、花うあつて甚だ奇なりつてある、
石礎とその上にある柱をさうける、その穴のぬい
てある、乃ち此の柱を舍利の重しとさうしてある、
建梁物を支へる、と重大な意味がある、その
此の形相ある、そんちをさうして、
とそんち八塔の五重塔（そんち元鳥朝の塔のちと云
ふ、そんちを）を解き、そんちを復した、そんちのあ
る、そんちのちある、そのこと、その塔のちある、

ルが危ういことある比

○徳川末期に子爵等も他種名家の人名を採して人物志と名づけ、小本も往々出版せられた。その内稀な本と可なり高價のものがある。家柄と大抵集めてあるが、浪義方面のものも東京にトント見ゆらぬ。北吹大政の承ののまゝ主に出た。後れは比ものを採する。浪義のものも五、六種寄せ集めてある比。このころ、いんと購つて漸やく此方面の人物志の備へつ比

一浪義の友録

一續浪義の友録

一浪義人物誌

一沙界人名録

あふり

文政七年刊

嘉永四年刊

一浪義名流

一風流名橋競

一因

一言名五輪

評

一折

一折

一折

此等浪義のこのころ、沙界とあると、浪義のこのころ、ハミヤカシのころ、北界と比る大橋の開校のころ、このころ、東京方面の未だおらぬころ、浪義の昔名を浪義新しといひ、北由カシのころ、浪義の橋と人物を比較して、このころ、浪義の長き、このころ、比してある所、月旦の言、このころ、浪義の、このころ、浪義を批評し、別に一帖を刻し、浪義の家がある、此時代の、このころ、浪義の、このころ、浪義を

感する。

○茶をを後ちておちしりて感しんことハ茶人と湯候
を鳥の啼嗽え聲きくしみることをある、鶯のつねを
ある、さるる、七元や鼓を啄き破つてもよいと、親
鳥の口を破つて鼓をつく時が、丁が卵の中の雛の
みづゝ破つて出るとする時び、内おの氣をなにか
かつしりてゆかす時ひあると同じ扱は湯候
をおあまるとことか、怪しむ此の心おの扱るもの、志
ししんを経験や直覚いふもあつても心の口は説
けぬとあるが、おちしりていふ聲を聞くはあつた。

○十一月二日前の雨雲の天幕朗清とす。つれ
の散葉をよき出さけ、ね生あつた。此の谷を出て、先

つ公園入りの見たり、こゝは可なり大觀覧の菊の海
列のうらあつて、あかしくまをえ田のつれ、例のこゝに
大輪の菊の幅を利をせぬ、人の加つたことある
りと大張無施に又葉をまゝとある、野菊のる
をおちしりて感した、公園を出て、瑞葉のこゝ
り三塚山の境内をあと返して丸山公園をゆめ、此
大隈侯の御像の建つてある、廣い橋本の左半より
か途を辿つてあつて上つてある、一塔村百とある、從
へ、こゝらういとこゝ此公園に凡政を流してある、板垣
伯の御像のこゝに二軒の掛茶屋がある、けんを七北
をと海掛の百人七家つておちしり、傷死する、大
隈侯の像のあつた、こゝを群衆の寄り集つて

陽氣あるとあるのと較べると、伯侯の性格と人氣とら
 ハッキリ地形むらむらとある思を有くは、伊能忠敬
 の碑の女どうもむらむらとある思を有くは、伊能忠敬
 りんと幽寂の境とありは、碑の背後に坂路とある
 石の礎とゆるゆると木が生つてある、北の坂を登る
 降のたことも、（？）のたを登るを降つて足任の
 七下行くと、段と幽寂の境と、橋と来り、北を登ると
 大樹と天を翳し、（？）のたを登る、地形と四角丘忽
 ち溪とま、（？）のたを登る、橋と架り、
 ありて、橋を渡らば又一橋と、（？）のたを登る、
 架橋の地位七丸を破つてあり、丘上と古墳の蹟と
 が、（？）のたを登る、標標とあり、橋下

こと石を興え、道とあり、（？）の徳川家の廟を
 してあり、（？）のたを登る、（？）の時節とあり、（？）
 地と一歩あり、（？）のたを登る、（？）の時節とあり、
 の鳥と、（？）のたを登る、（？）の時節とあり、
 ちあり、（？）のたを登る、（？）の時節とあり、
 氣を更とあり、（？）のたを登る、（？）の時節とあり、
 いとあり、（？）のたを登る、（？）の時節とあり、
 聖紀とあり、（？）のたを登る、（？）の時節とあり、
 うつとあり、（？）のたを登る、（？）の時節とあり、
 見ると堂宇とあり、徳川氏の廟とあり、（？）の時節とあり、
 の建物は、（？）のたを登る、（？）の時節とあり、
 ちあり、（？）のたを登る、（？）の時節とあり、

め此此境と所の無いのも**斑**と思つた自分もこれあ
るかと坂路を下つて池車まで峠に出た見れば山
を圍んで池を赤羽の赤天の池に毎々通つて
しおんたこともあるが此の池の前後の山
高さを測つて足を入れたこともあつた初め
此池十三段山に附属のものか、これも彼れう如く
段のある井戸立降の1の尺数を測るに足のもの
であることをわづら

○十一月三日の夕刻未定のあつた其中に大石の
が昔流の材料を録して示した。その
の端味をあらわす、せん念ひ、おのち

書畫一致といふ所からてもある
まいが磨畫の方は將軍も画けば大
名も画いたものだ。それが浮世繪と
なる。此等の階級では何が尊嚴と
稱立せぬとも云ふのが之を試み
たといふことは嘗て耳かぬのであ
つた。ところが此頃歌川豊國百手追
番の取越し展覽會で正に諸侯の浮
世繪がきが一入あつたことを確め
た。豊國門の一鳳隔國筋と、七が即
ち其れでこの國筋こそ誰あう、伊
勢は龜山侯の石川日向守其へてあ
る。いがかま化政前後の時代風氣は
乗はれぬと見え、三代目菊五郎
に四つ輪の紋所を與へ又其師豊國

の爲には「羊」の字を「羴」した紋所を
襲んでや、た程の通家トウカで公事の飾
暇には美人畫や役者の似顔を画い
て獨り悦に入つてゐたのだが、し

た藤原から画弓を一鳥濱國范女と
云つた豊國の女のきんは七歳のとき
御懸具ミケときと、七名裁で乳母附
きのまゝ、侯の江戸邸へ奉公に上つ
た侯の物した版画や肉筆は右の展
覽會に數點陳列してあつたが、其
つに美人の姿を画いて似たが似
ぬかいつれをこれと白波の是や瀬
川の問答するらんと贅した物もあつ
た。諸侯の浮世繪師！名からして凡
てはぢがうじ。

或時雲華に千利体の肖像に贅せ
よと頼めた者があつた。雲華はいき
ぢり筆を把つて、孔子は人を仁
釋シヤクせは人を佛にし、孔子は人を仁
にす。大膽なるが、利休は人を茶
にす。

とやつた。
雲華山陽と同道して、日田ヒタの淡窓
を尋ねた。淡窓は、ひびく二客の來訪
を懐ナツふ、これにして、記念の合作の
小取コトリにやつた。淡窓夫ウサの孔教
の優ウツクシを示さうと、小考コカウへて、釋シヤクせ
と孔子と角ツノ触つて、釋シヤクせは投倒トウダウされ、
孔子は両手を擧げて勝を表する圖
を作り、雲華に廻して題詞を請うた。
すると雲華は、

孔子三世を知らず、釋シヤクせ絶倒して
之を笑ふ。
かゝ事とぢがけに應じたのであつた。

各藩の名主庄屋は年貢を納めざる農民を自邸に拘引し寒中庭内の水牢に入れ或は木馬に乗せて呵責すること行はれたり



木馬

水牢

雲華又或時
 此れ人に需められて對美の
 達磨圖の畫幅へ
 九半面壁何の甚私しや十年浮き
 沈み
 達磨曰よ一りこそしたち一
 と替した事があらがあら

在長崎の和蘭陀人は園妾たる丸山の遊女が情夫と私通すれば裸體として全身に墨を塗り館外に放逐するを例とせり(挿畫七十二個の一)



の明治年間に出たといふ
 今の珍本板と受
 けお市の價格とある
 る玉籍も二三冊と
 送るぬ徳川の盛世板
 と云ふ二冊本とあると
 彩もそのあること
 あらうが、今と十五回
 程の傍らあると云ふ
 改に余ら加あやりのあ
 う所の又日本製と
 圓説五冊と踏心得

此の書を明治十年、内務省が奥玉の傳授會に
 出資の以て見ることが一に傳授會のしるしのもの
 彩巻の終つて這入つてある。又この見ると
 十七冊の行の荒とあるが、其冊出来の
 自分の千入つたのを五冊のむ物をもこの
 出版のぬと云ふもの、此の五冊にぬめを
 巻ふと

- 一 錦畫
- 一 淡墨海苔
- 一 龍巻海苔
- 一 昆布凍瓊脂
- 一 合し塩

此等の書は尾のと價者二十数とあるが今も各
 冊三四十文の價うも、必竟彩巻の終つぬめ

とあるものがある。尚ほ明治六年の版で石品産
 所考といふ二冊の本を得た。これと各府別石
 名を掲げるところのあり特徴を注したとの
 である。従つて史考に關係するものを入つてある
 岩の術向のものもある。単に一本が新書と見
 られる。何人か仿しを出版したものと
 見られる。版式と較ぶれば、今も珍本といふ扱
 いらるもの

十一月三日記

○此の本の古に改味を感じて近來岩集をつつと
 あつても伊藤錦雲の春西本草名疏を得た
 附録一冊併せて三冊文政十二年の刊行に像
 多く羅面名を羅面名と列す和名漢名と

動眼す、醫者たりんより、ホニニ一より、植物を
分類する、花の形態や花茎のあり、元々綱を三
つことを考ふる、如くしめたるは、恐らく此書に
記するより、此書より泰西植物のあり、日本に
未だある我の植物を補ふる結果を述べしは
此に於て尤も本邦に適切な関係あり、題言數
則の内、特に二則を多く抄して本書の内容と
泰西人の日本植物に就ての著述の一斑を知るの
便に供す

一 西洋人撰皇極本草者、^{ケンカ}實榕耳、^{キヤク}春別酒瓶
二人而已、自餘未聞有綿至設而、^{キヤク}愧耳尹垣
而等其者、蓋其所収未僅、然尔、^{ケンカ}實榕耳

者、元祿三年^{破紀元一千六百九十一年}未定、^{元祿五年}破
九十二年^{破紀元一千七百一十七年}船帰所著本草書、^{撰之}在山徳二年
破紀元一千七百一十七年^{破紀元一千七百一十七年}亦未定、^{其の年}
永四年^{破紀元一千七百一十七年}其の年
船帰、其間僅一年所、而訪来、^{其の年}其の年
本草書撰之、在天の四年^{破紀元一千七百一十七年}其所撰
定、新類二十二属、新種三百十六品、其功最
盛矣、^{春別酒瓶}
木をとり、乃ち林娜斯の著と記す、^{附する、林娜斯の説}

一 西洋本草之学、分別科條、區分物類、多
耳、^{耳、福耳、山馬}取法於花之形態、定為二
十二個、林娜斯之解剖花蕊之法、定為二十

個毎個系以目、目中分類、中別種、西洋近世
 修斯學者皆一從此說、而四大海中、一切植
 物、百千萬億、品類夥多、雖以奇詭變幻、
 不可究尽、要皆不能出斯二十四個之範圍、矣
 嗚呼、彼土本草之規則、與和漢之流迥別也
 故非詳知林娜斯之說、精究各個各自各類各
 種之微澁而定之、而漫以臆裁充用、則英非
 謬之失者哉、希、以有者不可不察正焉
 本書二葉の画を収む一、春氏の古画像一、二十四個
 花解の因也後者より彩色を施しあり
 又曰く本書二冊、春氏の著を記ししもの、二附
 録上冊、と一般認爾私の方言録を、物に漢花

をおし、下冊、と林氏の二十四個の解を収
 める
 十一月五日記

〇柳亭種彦。文政年中。著した源世形六枚屏風
といふ合巻本と。尚つて燗大判に燗譯したること
あるのを、好まざる家の問ふことを持してゆへ、
二年、梅彦の手で、漢字交り、紙面取して出し
ると同時に、吳譯して、七の七日本紙摺ひ同じ体裁
に出したこともあるが、原本七帖より多く、海布せ
ず、漢字入本と稀の字あり、尚つて吳譯本の
坊より現れたことと無い、とて燗譯本にあること
〇前年、龍徳にぬめりものを出し、そのか、其の
うらむまゝありんたことと無い、列傳体不換史と
燗譯に就て左の如く記してある

源世形六枚屏風 合巻六冊合二本 三十枚

文政三年七月
旧年正月廿四日
柳亭種彦作

本書の *Kundakume* といふ題名を西紀一八四
 七年、奥州村人 ドクトル、アラグスト、フリーワ
 マイエニ之を撰譯せるを文及び挿録をも其後
 の載せる **維也納** の皇帝及び政府の委託に
 係り印刷所より出版せしむるに我に
 二、五〇七年、孝徳天皇弘化四年、程彦
 級後五年、又英文の梗概譯もあり
 今小嶋と英譯本をも併せ三種年々入つたか
 物をも長く心うけし英譯をやつて年々入つた
 事のある、書を格別珍とすべきものなるべし
 外人の譯し比と異なり、めづる家ごとにあり、
 ふるも奥人の何れも此を選んで譯し比と異なり

う撰譯を見れば其の動機も切なるを感ずるが、
 洋い書味のある譯もあつたといふ(十一月五日)
 此書のいゆら浪人の男女が教書のの境遇を其の
 互いに悪意し終る心中とまじり行かんとして
 治統を清、心中七、悪意の目的を達し
 とすありし、夫人公を三の坂の村とす、
 の小松、著者自身の序に、七帯套を
 破つてあることを左の如く不のめりし
 此書に無の物語もあつた敵役異人妖術
 怪談怪談狐狼とキカへる家の系圖や寶
 物紛失すもキカへる、**鹿子** 鹿子名
 何れ、印の死かんとし、**割** 割、神や佛の

昔知らずや腹切身給ぬまの血をみることこの世に
しむるいふに

埋入る物と地を懸て記し此所以七腹切や怪談
の無いらむむあらうと

○十月二日、そのうち大股部に入り、初めは後家の引移え
に隠宅を親次、前堂に納しに伊勢の花戸、泥津に直
進して別荘を解き不吉し、其の傍に建てては木の
木柱とある桑畑と志きり、暗さぶあつたが、竹を
ふい可減のよのひある、才一と物走らぬ控に感しに
のを言渡の節、ふらふら暗さること、あつた云国の左手
に狭い一室、執事の部屋と充てあつたけんと、この
節、狭い一室とせよとて七大張家の執事部屋とす

この是らぬ、併し煉瓦倉庫に、隔り二室、その倉庫
と世に今志きり、この中、築や、ある、この出来ん、
漸や、この、是ら、あ、後家の名聞を、七、
二間、つ、き、七、七、の、部、屋、と、較、べ、と、狭、い、
だが、隠居を、い、この、位、を、い、う、南、向、き、
日、あ、り、う、う、う、を、見、電、も、位、地、を、い、う、考、へ、
ある、後家の、金、七、限、を、あ、あ、あ、を、考、へ、一、世、に、
彦、橋、を、い、割、を、い、う、う、う、出、来、て、お、い、え、に、
廊、を、傳、く、一、室、に、あ、り、と、志、候、の、初、め、を、い、こ、
と、今、も、建、て、海、く、と、い、は、す、の、位、を、い、う、入、つ、て、母、を、
う、う、う、初、め、を、拜、す、る、こ、と、出、来、て、候、え、ら、う、と、あ、
る、二階、の、一、下、間、が、く、い、ま、は、夫、人、の、女、を、い、南、向、き、

と出来てゐる、その下が後室の襖やとうつてゐる浴
室に松室をいすゝと被りてゐる、甚だ四六張敷
の式に呼んである、下世部を二間もあつた、
匠室もあつた、何れも花元の程、高麗、別荘
お庭に出来た、比の比、狭いと云つた、附て廻るけん
と後室もこれか湯室してをく、植、見、言、け、い
ろくの装飾、い、アウを隠し、みる、みる、割、を
し、よく見、て、あ、あ、う、う、玄、園、の、入、口、式、を、あ、い、く
横、張、を、い、ん、ば、全、体、の、あ、い、く、を、植、を、あ、い、く、植、
家の品位が下の扱、感、を、い、ん、ば、庭、の、あ、い、く、の、あ、い、く、
裁、の、風、流、を、あ、い、く、と、あ、い、く、植、の、細、工、を、あ、い、く、芝、を、二、面
に、植、え、る、故、向、に、さ、う、い、ふ、今、あ、い、く、植、本、を、い、く、い、く、

てゐる、後室も此処を他室の後の扱子、い、ん、ば、此、年
の扱へるとメッキり、志、表、を、い、ん、ば、扱、の、あ、い、く、
い、ん、と、する、を、引、止、め、る、内、の、扱、を、い、ん、ば、あ、い、く、
今、對、方、を、い、ん、と、い、ん、ば、あ、い、く、の、あ、い、く、
不、必、の、可、き、う、ま、く、の、扱、を、い、ん、ば、あ、い、く、
あ、い、く、と、い、ん、ば、あ、い、く、後、室、も、い、ん、ば、あ、い、く、
い、ん、ば、扱、子、の、あ、い、く、刑、の、あ、い、く、
地、の、扱、の、あ、い、く、い、ん、ば、あ、い、く、家、の、体、面、上、
便、に、する、と、い、ん、ば、あ、い、く、自、今、の、あ、い、く、
是、の、扱、の、あ、い、く、表、を、あ、い、く、い、ん、ば、あ、い、く、
と、再、査、を、あ、い、く、い、ん、ば、あ、い、く、
○考、と、い、ん、ば、あ、い、く、い、ん、ば、あ、い、く、

リ、これぞどうも、と云ふ、えんぶ

の、快七のときあり、紫衣釘七おを

取つてある、快き、は書しと中川柳おの、華三係る、柳お

じう、味も、刻、若、必り、は、もの、と、云、画、を、山、お、多、味、お

お、仙、若、あり、流、石、に、お、用、也、今、う、つ、寸、珍、帖、中、川、お、氏、き、お

お、未、れ、と、ん、あ、る、ま、り、し、今、指、動、さ、古、池、を、お、ひ、し、て、若、い

受、く、お、つ、も、の、お、人、に、頼、ま、ん、て、出、来、る、ま、の、に、あ、る、お、人

お、の、趣、興、の、お、り、お、出、る、ま、の、架、中、の、路、と、お、し、し、十

一月七日記

○昨、夜、寝、後、良、山、を、茶、話、を、後、み、二、三、時、す、と、云、江

話、を、得、り、し、北、を、お、印、人、河、部、經、州、の、隨、お、し、し、雲、并

の、お、話、云、と

豊前の鴻雪舎大舍上人、此、ころ、一、半、子、を、得、り、し、
文治年中、經、島、寺、用、お、り、若、の、若、也、物、老、道、工
綴、古、雅、愛、す、く、し、山、陽、免、齋、古、詩、長、篇、を、心
つ、て、之、を、賞、す、茶、山、お、め、め、を、見、て、歌、の、を、云、如、此
名、無、恨、菜、肉、食、僧、之、手、と、上、人、因、て、賦、し、て
云

鴻爪不輪泥、燕雪秋南春、北跡後、三従来

詩句、厭、蔬、筍、一、任、君、呼、肉、食、僧

遊、余、に、嗜、し、し、肉、食、僧、の、印、を、鑑、せ、し、と、云、お

竹、苑、人、大、舍、上、人、食、肉、の、歌、を、作、り、と、云

凡、僧、昏、り、皆、歡、粥、大、舍、上、人、獨、食、肉、凡、僧

歡、粥、面、目、醜、上、人、食、肉、腹、胃、積、飽、向、天

衆説大乗、天为雨、鬼欲哭、餘其涕、溢指
頰、亂為茵、井、并、並、素、福、笑、他、方、閑、未、嚼、戲
卻、為、韓、愈、所、寫、辱、上、人、所、味、是、道、駛、貧、難、養
何、曾、後、口、腹、船、子、黃、能、若、釣、鉤、北、禪、白、牛、
刺、皮、角、安、得、唇、蛤、七、八、斗、供、養、上、人、恣、大、嚼、
噀、出、無、教、人、物、其、極、淡、

○上人真、蛤を嗜む、
一、江庄の人、龍久、姓、張、名、良、道、字、子、基、嘗
つ、浪、弄、に、宿、り、此人、画、梅、を、能、く、書、題、詩、亦
自、也、浪、弄、に、宿、り、の、日、画、梅、を、書、き、ち、の、多、く、
或、る、人、謝、す、る、梅、を、名、を、書、く、歌、妓、十、数、輩、
を、余、と、酒、を、供、す、此、山、を、名、く、
歌、人、一、つ、を

贈、山、人、墨、三、味、淋、衣、畫、梅、花、不、信、心、如、鐵、羅
漢、浮、元、作、家、と、浪、弄、の、妓、梅、を、山、人、と、名、く、
あ、る、名、亦、梅、を、書、く、山、人、の、名、不、酒、梅、屏、幀、
皆、山、人、の、名、也、梅、也、常、り、て、人、の、謝、り、に、死、
を、贈、る、中、の、身、山、人、謂、く、梅、を、和、請、が、多、く、
不、也、梅、も、亦、和、請、に、多、く、所、也、今、君、和、請、の、
物、を、画、し、て、和、請、の、物、を、得、ず、と、い、ひ、終、死、す、
情、の、鐘、と、い、う、之、を、吃、ら、ぬ、馬、心、を、遊、
西、念、者、に、瘞、し、て、和、請、も、書、り、神、と、名、
瘞、病、家、と、云、神、中、の、日、大、に、雅、名、を、
考、し、て、白、粉、を、書、き、山、人、酒、を、嗜、む、伊、舟、の、
酒、家、を、別、處、と、名、く、余、と、龍、山、酒、と

云相夕杯を創し肉如う余曾るを研定書其
白鶴仙史一の印を刻しと贈る山人文三橋の印
を愛花より文三と云く深頭流水一因つて又活水
の別號あり山人題梅二條句云

疎影傍香自一家山人おる好吟城南
枝倦は首あり三世堂在活新不在多
今曉雞分雪其梅瑞花玉屑白蟻
詩人拚命寒澹立最愛活香過水来
此の二節原文と物とあり其の意を雨の略叙
す

一龍峯庵のむら其體婉麗を清人の観を潤秀
の好むに似たりと評せしよし角床樵葉の載

すと云ふ、その婉麗を所以と稱するの危術に位
しる感心ありやと梅柳拈しはる六如茶
の活ありなり

祝龍某先生遺墨

何年持個秋蛇手、字就凡前春柳枝、
後家録古卷或庄、觀舞得暖支

龍と喚年、祇園に河原に任しなり

一唐の貞元廿一年台州の司馬吳顛僧最澄日本に
還るを述る詩一首其叙云々

以貞元二十年九月十五日、藤海郡、謁太守陸公
献金十五兩、茶籠紙二百張、花笠、書二、及籠
茶四提云々

龍茶をとりて用ひたるを華紙墨七若しと
此地の産物なる者なりとの欺案川井宗の談
とて載せたる一ツ師の大要を抄す

一金瓶梅の西門慶待詔カキコせして頌を詠カキコらしめ
重行を活弁として道引を行らしむるありし初
の之を讀む偽札の多しとす後る宛以年間の漂詔
詔を讀む彼方待詔の醫次道引を并せたる
の多しを切る漂民流ニ云彼玉の滯る中病者
て大醫の薬を服せしむ僅かあるにがら
りしと頼彦を毎待詔に托す神前道引
抄及に一粘一文の膏薬ありあるに心で染
る水のしあ云云

一支那留俗古茶を煎すると薑葱をハ塩を加味
す茶本来の味を害すこと甚し日本七名
つて支那で倣ひ塩を初しはことありと又
良心中茶詔に 惟良茶詔弘仁天皇出雲臣
大守の茶の歌を初す詩人

翠懸城高家盤 吳鹽餅味味更美

の句あり

○時の粧を好むもの

石家年表

一冊

増補正徳世譜

二冊

源氏流花記

三冊

とてうら、年表を文久年官川喜多直下り輯出
る所を國学者既人傳の氏名を年次を逐てあはれ
す、此の今を名と稱也正徳世譜を由年流版本あり
れどもこれより原本に大徳寺の系譜あり、福のく血脈
継承宗親に柱を載るる、不立又女のといふも、
承やうきしきその、繁中に出る所譜の各一
二行あるも此の七録く可く、流花記を由年
り南都の美都龍下の著すも、龍下を東山殿

とてしうしと折く其のまゝなり

○余が日々購入する書本を本年夏終閉を得分
目録七冊に収め、其の日購日載を例とせり、而して別
二年本目録二冊あり、亦一冊を此年十月迄の分を収
め、あるの圖書六冊五十一部、亦二冊を此年十月迄
の分を収め、今檢するに此一年得る所の書の五百
を起るの所謂在在といふと稀觀の圖書のみを
ありて、その一呼得可きもの其の多きを占め大
体一部の價十圓を下り、一年得る此の五百部
の原價を別に購書歴と署せる冊子に載せり、
と大略五千圓を下り、亦は在在自録に入らざる
ある部の冊子、其代金を合算せば七千圓位の上

余の貧世帯の

康侯の道樂 〇とあるとて、謂ふ可くも也 (上)

月十日録

○阪上五峯、未訪ニ付、牛乳を供し、終日語り、余五峯
の贈る、康南海の唐蘇舟双楫を贈り、一後克と
を需め、其の家系の六相碑帖を多く出せ、これに
玩賞あり、五峯、劉定白の録出帖、六枚、相の一
碑帖、傾倒、就て字のいと欲す、乃ち其貨、其の、後友
那料記、ついで、五峯、版部、疾馬あり、肉食
を欲せり、余山家法供の原本と、余、ついで、本に
目録し、そのものを出し、示し、これを支那宋代の
物、其料記、法、各項、詩を採して典故を、
唯、此、強、後、又、難、きを、憾、ら、し、五、峯、同、く、是、ん、を、

とんと創始とせん

(十月十日記)

○南藝文庫より近刊二冊寄也来る。同文庫蔵本
孝行録と流敗の附しものこ書りて孝行録其
本と云ふ、書首に至正六年五月李齊賢の序あり
り、此本古鈔本として日本に傳り當るを狩谷松翁
之れを考す、序文の一陽と板高の印あり以て証す
し、世に二十四考といふものありて流傳するもの其の考
者七知んず、二十四考と定むるも也、断りて考すも
たのせるものこ、必竟支那の書にしてその所序
文に元と云ふ二十四考に三十八章一外一章を加ふる計
六十三三章と云ふし、ことを知る、而して其の追加
の八の序文、菊高と云ふもの、二十四考の(四)と云

ひ且つ四つしめたるも、序文の著者吉昌権王は後を
序文の著者ありとあり、續文献通考に元の郎
君敬の撰と云ふことと云ふハ誤也 (十月十日記)

孝行録序

府院表吉昌権公嘗余二人書函二十四考を回僕
即其其人頗傷之既而院表以書以其好又献之
大人菊高菊高又手抄三十有八章
而序其丘子附子路王延附其香則為章半字
有二其辭終未竟於元且僅蓋欲田野之
民皆得易後而悉知也文士見不指以為誦唱
符者或希然念菊高公八旬有七吉昌公六
旬有六而晨昏色養得其惟心也亦其某子

七十而戲綵者何異僕好大書物書更爲權
氏者行積三章然後乃止至正六年七月初
吉李齊濟爲序

○上月高僧多事大段師之利。新侯以之。高山
の師に移えし。家具の世相に任かりし。余は嘆して
公畫幅を漁おんことを以て支余派して五十幅
斗りを展覧し其の存すべきものとををわつ。
多くは此方より別來物も存すべきものも三
個一は透刻侯余に二品を贈る。一は古銅塗を
觀音像一は范仲淹の伯夷飲の墨本一卷とす
此二名侯の花什一に以て家珍とするべし

從兄ハ必ス言ハシテ可ナリ若シ言フトセハ從兄而島云ニト書キ起ス可ト大業ニシテ吾從兄也
云フ以上ハ文中ニ離合ノ感トシ懷舊ノ情トナリ君ノ干係ニ就キテ叙スル所アルベキニ似タリ

○字

小精廬記

從兄弟間柄ナレバ市島何ニト字ヲ用フベシ以下君ノ字ハ皆字ニ易フベシ

春城市島君吾從兄也卜居於江戸川之南名曰小

精廬余每入東都必訪君々壯歲有志於經綸曾大

隈伯之樹立改進黨君与同學高田半峯坪内道達等

拮据尤力當時駁材集帷幄亦擢七又擬七槍君居

其一後抗政敵争霸東北也罹筆禍投獄而不毫屈

以改一
八入政黨争
朝東北也膽
私壓敵一

謀議畫策

○有膽略其遊說徇東北敵黨望風委靡以言觸忌諱獲

聲望益隆。越任堂友推為領袖。尋舉眾議院議員。以侃諤聞。既而

屢在帝國議會侃諤。有聲晚去政界。專好圖書。如無

復意于風雲者。今茲辛酉。君囑記。余或疑門牆之瑰

庭園之宏華。屋棟之且。君文章與事業。咸知之。其

所交非名卿鉅公。則一代文豪。而小精自命。庶幾于

徇翁取魚明以名屋之意。欣然。焦明巢記。得拙堂文

著。今余不文。何望。乃一馬。凡物大而蕪。不如小之精

尤。萬鵬程時。不免鸞鳩之笑。八方法門。別有教外之

傳。吾之徒涉獵。浩瀚圖書。或不及精讀。十部小冊之

有利者。由大而蕪。不如小之精耳。君嘗自刊書五百

餘卷。其所集達十萬。今皆廢之。更蒐袖珍寸本。搜索

多年。弄藏上數千冊。々小者不盈寸。又蓄印踰千顆。

小函鱗比。秩然滿架。而不以自足。亦有見於此乎。抑

猶謂有使地。抗有唯小。故易藏。唯精故有用。命名之意。其在此也。歟。願

當世。於是乎構。精。益。充。焉。

庭園之宏華。屋棟之且。君文章與事業。咸知之。其

所交非名卿鉅公。則一代文豪。而小精自命。庶幾于

徇翁取魚明以名屋之意。欣然。焦明巢記。得拙堂文

著。今余不文。何望。乃一馬。凡物大而蕪。不如小之精

尤。萬鵬程時。不免鸞鳩之笑。八方法門。別有教外之

傳。吾之徒涉獵。浩瀚圖書。或不及精讀。十部小冊之

有利者。由大而蕪。不如小之精耳。君嘗自刊書五百

餘卷。其所集達十萬。今皆廢之。更蒐袖珍寸本。搜索

多年。弄藏上數千冊。々小者不盈寸。又蓄印踰千顆。

小函鱗比。秩然滿架。而不以自足。亦有見於此乎。抑

猶謂有使地。抗有唯小。故易藏。唯精故有用。命名之意。其在此也。歟。願

昔者物且未曠。達乃以

無乃類此

而

學之為道。在精而不在博。書之為用。在精而不貴多。

均之蓄書也。寢然巨冊。未能相卷。而充棟溢堂。翻三小冊。則累萬卷。而有所餘。

不致

亦索于函。或善。皆求其精。

余又異君鳥。往年酒豪自許，浩歌痛飲，吐氣如虹，談及同

軒冕，今則清廉自持，酌醇數杯，止於微醺，亦豈出豪

蕩，入小精者乎。吁！君小精自喻，而其行亦如此，朝讀

古書，夕友天下士，以導後生，以吾道則余知其益

於經綸，有弗可量者也。蓋聞飽太宰者喜菜，食猶酒

後，求茶君之徵記，不於都門文豪，而於草莽隱士，余

曰ク千古書曰ク
天下士曰ク佳酒
一三前段ト照
應ヲ取ルカラス
之目ニ立テ宜
シカラズ
隱士モ亦文豪ニ
非カリ得クベカラズ

結末拙堂、又惟次所疑、以為記、不知君所求果出於茶氣耶、抑將

踏襲シタル痕跡アルノミナラズ、雅為菜瓜耶

列ヲ欽クガ改、改ムルヲ可トス

正芥

真島信城 再拜乞

公平康園 再拜

○前掲大隈信を贈るに范文正公韓文伯
 未欲との王世禎の跋あり又慶應三年薩長侍
 後山田有松の跋あり此一卷を天保中中山浦源王
 子朝意順聖公に献する所を公の寶愛せし
 ちのとて其書猷勁愛まじし此人宋の名臣と
 とも岳飛の色を多く傳ふも此人の忠ハ日本に
 く傳ふす此の模本も余の初めに見る者也
 ○ダンチの研究家として大改に花を大賞
 壽吉といふ人余未だ面識を付かざる余遠ハ一
 懇意を北原大改に而今の折其の意をのむ
 と割愛し余に贈ふべしとて今津下に托し
 七の今に入手す其書も百年程前に英國に刊

挿繪の子現存有拜天竺の石を姓し
 神曲の珍版一本を贈呈し快く受取ぬ
 フ町寧まろけ松移らぬとて此稿はマフス
 君はピツカリレグのタイアをド、ウラ
 僅々百年前の古版を之とて辨歎するに
 此世に珍なる甚帳も粗末のものとして
 珍版を述ひいたる本を以て此版は英國
 也の伊能神曲定印の版を以て外國の
 なるものか、噫天竺の版を以てする
 本もその部を和しては早々の珍版中
 いんらたるなり、また挿繪の字を以て

○前掲大隈信を始るる范文正公韓文伯

拘はる幸々金津石の軍少坂の板倉を和用し
陪呈は、以るる重一なるを、其が子たる切葉水野
は善通、タレキノと稱す、極小形(二町十石、一町十石)
のヤウ、コレビツカリ、ゲ殿と述ひ、非常用のウラ重一、是は
右伊振、抄中なる如は、重一、一

ナリキキ

大かゝ書所ナキ

市島謙吉 抄

行し、豆本、ダンテラの、デウアイ、ニコム、デー、止、
此の、也、之、愛、公、家、と、して、や、こ、え、な、ア、ール、ス、
ニ、ナ、リ、ノ、献、す、た、え、ニ、刑、行、し、た、る、も、也、ニ、の、て、十、
餘、百、の、書、り、七、古、殿、香、揃、た、し、ハ、物、架、中、の、珠、
と、ま、ふ、し、

十月十書記

○好も修業、物、終、と、その、心、コ、ニ、ヤ、リ、本、大、細、字、何、人、の、
お、心、に、お、け、る、を、お、け、新、郎、の、い、ろ、ハ、娘、の、子、刻、念、の、後、
北、の、や、の、ま、後、を、う、つ、土、の、う、り、に、関、係、を、お、か、婚、つ、て、後、
あ、る、本、地、私、家、子、の、ま、を、叙、し、る、う、り、く、い、ま、あ、り、も、
こ、と、お、り、新、郎、の、後、家、の、各、と、取、り、膳、に、飯、を、合、す、
を、お、初、め、を、お、り、く、い、ま、あ、り、江、の、島、の、後、お、り、海、中、
生、海、原、を、標、を、お、り、く、い、ま、あ、り、を、怪、す、と、あ、り、し、名、物、を、子、

を引き海軍海賢と号く五強廻海男子と見く
男根の似るを以て辨けられんが形取を淫婦の心
を動かすに及ぶやと諷くもおうし、東都の都を御
所也といふ淫を奏す家あり世に公家と化くる婢女交
合をも男子ニもとむらんを金瓶を淫んたれに及ぶ
す性慾満足の以てするんが男女子に名譽や中納言
とを賜ふ七のありと記し、志州の某所には白晝地
中と交合を媿ぬする者あり極むを殺さるる女も終
んが直ぐあるを例とし、其詞僅くも一時見るにん
婦心の性慾をえんはたれんも女もすし、其後之
ふありとすかし、お物三條の婦人の夜這あること
を記す

○少時十二時眠覚め、電燈を點して枕頭の雑誌を
取り、茶守に後あり、出と浪華市街延びると
酒為本体のよも也四冊本も末巻終のふねあ
はりの人可亭銀鏡の浪華市に宿するよの日の哉
心也、俗も多んる大改と江戸の市中の風俗
の異同を比較するものと名と評志する一後
興味も免れ、末巻も圓にあらはし、文を
補つ、余性年、早大の校用を幕ひ久しく
浪華市に宿し、東都と大改の風俗を比較
し、聊の雑誌に書きのけしことあり、其後
巻末の巻を大改の出版席の撰、とすし、七一
二子入らるるしが、やゝあつたむを二子入

入んぞんをく、きうく、夫を考とさうし、ちんを
思ひ出たう、あ時を北者の名す、むらさきし
也、此記録の記録も、南村通好と云ふ二冊本
あり、いんちと、金と、紫と、あり、いんと江戸
の書屋の持主と云りし、傍ら松岡行分
に譲り、そを、多くと、編出し、そを、を
正し、その、あ、あ、た、に、彩、色、の、修、を、自、是、し
録、の、重、き、あ、め、海、の、の、し、ヤ、し、本、体、に、倣、し、
その、もの、さ、も、内、容、を、地、草、と、も、見、る、も、こ、
の、し

十一月十日記

北の天保六年の事、其頃の次第の風俗を記し
て、いんち、中、に、定、寶、八、年、刊、本、雖、波、鑑、の、由

瓢箪平の、も、夜、見、世、の、圖、を、縮、き、て、也
あり、いんち、を、変、じ、て、こ、の、越、を、か、と、り、道
物、地、に、あ、し、し、と、う、也、其、所、新、所、か、し、と
細、て、の、通、り、筋、を、移、り、そ、を、さ、し、天、保、改、め、を
浪、来、る、船、經、津、山、心、高、橋、筋、に、公、林、う、あ、つ
た、こ、と、う、記、さ、ん、と、ある、五、六、町、か、う、う、の、事、也
五、六、十、軒、十、巻、を、連、ね、て、あ、つ、た、と、い、ふ、
と、う、の、大、り、な、故、に、そ、の、變、つ、た、也、他、の、か、こ、也、い、に
と、う、の、り、ま、く、ら、い、後、ち、を、興、ある、也、也

○直つ治信威の、蘇、利、木、和、を、印、刷、す、る、事、あり、其、後、に
附、す、ん、き、跋、を、五、卷、一、全、の、た、か、に、代、へ、す、右、の、水
ある、也、の、即、其、の、手、也、加、筆、と、銘、書、神、酒、也

書路村小稿後

客冬去年真島信城訪余京師刻其文謀携來謀余余乃命酒共酌

指座上巾箱曰此余數年釋精內所所蒐聚凡二千冊小而製

精余居之所以名小精廬請子記之先余且為子任劄

事裝成袖珍以加藏吾巾箱中信城大喜北歸後即草一

篇見贈余未滿意為屬改削注復數四稿纔定而信城

病暴歿矣悲夫嗚呼信城幼從鄉儒曾我簡堂受經不甚刻

苦修鑿學于東京農學于長岡皆不卒業唯喜文章矧

矧矧獨習三十年特見夙好之黨而文稿之刻因余記文

之囑遷延數月終不得其成遺憾果為何如一念及此

寄園雜草

脫帽看詩室藏

五內為裂自謂余既獲若罪作城於生前寧又未可負於身

後乃校理遺編以付手民世信城為人曠達嗜酒甚於

文常謂文章在我則醉戲耳或終年不作亦唯酒不可一

日無而一生酣嬉以終未必為不幸矣顧余區區之意

信城有知當一笑于冥漠中也

笑余癡絕

小精廬

書路村小稿後

客冬去年真島信城訪余京師刻其文謀携來謀余余乃命酒共酌
指座上巾箱曰此余數年釋精所蒐聚凡二千冊而製
精余居之所以名小精廬請子記之先余且為子任劄
事裝成袖珍以加吾巾箱中信城大喜北歸後即草一
篇見贈余未滿意為屬改訂制注復數四稿纔定而信城
病暴歿矣悲夫嗚呼信城幼從鄉儒曾我簡堂受經不甚刻
苦修鑿學于東京農學于長岡皆不卒業唯喜文章矧

矧矧獨習三十年特見夙好之黨而文稿之刻因余記文
之囑遷延數月終不得其成遺憾果為何如一念及此

寄園雜草

脫帽看詩室藏

五內為裂自謂余既獲罪其作城於生前又未可負於身
後乃校理遺編以付手民其信城為人曠達嗜酒甚於
文常謂文章在我醉戲耳或終年不作可唯酒不可一
日無而一生酣嬉以終其未必為不幸矣顧余區區之意
獨以醉戲為念其九泉有知信城當仰天咲然笑余癡絕
也已壬戌小春月堂兄市島謙吉枚淚識於小精廬

○昨夜自分持りしも韓施一ツ橋の代方家の同定居を
 得し此のつ七四谷の三河を牛内合と云ふ。例と
 つこの比をも、錫と扶もいふ人おせしむ。漢一版を
 話と交わらざる不便いある所と云ふ。此の比を日比谷の支
 那料理店跡に立うに聞合し此の生石同定三十七
 名(北内より五六名)地方(指す)と云ふ。如きありし比に
 果十四名出店し比が、いつ七名も出店する雨も
 ある。其の差支らう多う。これ、志をうし大坂より砂川
 作波のむごこと冬をうし比とんを踏定むあつ比
 古尾権平一七出店し比、これ、んを自分と取つて
 一別以来の雨もいある。砂川の初め出店し比に
 は、未分も中、の多敷と、十五年以来初めを合す

○損をぬぐい、中より銀介と七勢のむごころ、音
 二、損をぬぐい、中より銀介と七勢のむごころ、音

高田早苗 関直彦 野田春兵
 根岸錬治 田中山平 石海海
 山仰徳大 堀 大尾権平
 砂川雄岐 余
 在のこころいづいづ七出店し、赤心大高し比のこ
 ちの鎮法 中尾良三 石川代松
 田中鏡音 堀 中尾良三 中尾良三
 といふある、その出店し比中尾良三根岸い
 年あり田中と名川いある。此、北方人と云ふ。実子

六十を越えをある、一回の年齢を平均して五分
六十二強と云ふことありと誰れいふらうか、ナント云ふ
るも最早をいふことあり、此の十四人の内は現後の獲
あるものを土方の中へあることあり、此の事
は、志し、皆に所お愛元氣旺盛である、蘇
を前身の中くといふ事を痛み、先以米田に
んとする前も出せしに任であるのに強を出せ
たが、思つて人々も其の元氣、うまい、何んか酒
量も減したが、若し他疾の連中を不相愛
びある、高田と出方とある、此の事、若し、この他
疾、疾の、その偶々、其の、料理の、
出しの、いふことあり、昔物を、
十二

へるまゝ、四十年前、湖のその光景が、ある、
を抽出し得る、その偶々、七時、アインスタン、
中央停車場、に着く、その、
外へ、出せし、其の、
この新説を、その、
リ、出す、その、
説、その、
いと、その、
く、その、
一、その、
ひ、その、
先、その、

：海濱に出いひ比おのりて三十分心うたしと書ら
ん。これと北同定今うと破格のふん。えと誰れが洋
行して切つても其の後法と多く扱ふことハ無つた
皆にまんま之れを黙然隠すもの忍耐ハ無のうの事
ハ、海濱の法一とてのう無味かあつた。閉合の折
英四と本玉の傾えを根定が多くの轉すの
勢を謝すしと提議したか、折すたる自分も
えを換例ニ度うととそを控縮し、次きの折
る田中と若川を今うと指名しん（正月十九日）
○昨の坊子に、祇園南海の一夜百首と得た。これ
と竟政年万葉命の出附しんハ本七、稀観のとの
とあり、南海とちや年の浪らと詩の天才と目を入

常の二夜百律と心しんを感しんこと云いん。或
と之んを終ふものうあつたのむ、再び百律と二夜
これの江、北書のと前後中二首詩の扱めである
白人とこれら切つたしとよく文人の意をうた
るううううううううと思ふをうたう、北書と
得るは遊人ひものううううううううと云う、巻尾に
ハ南海自身の跋があり、巻首より島石の序、うあ
る北島石の序の中、才二回百題と云う、海のうを叙
して云う、秋令の置酒花宴各命題、南海草
に任せ六十餘詩を心しん而して日暮る、南海のう
徒ら余す不若の題と同一きものあり、故に
若此北島と云うと、何れも併し、七元氣を治し

更々葉を走せ夜半にもくす四百篇の集を而も
前後二篇一句雷の同くくともうくとまふ南海
の時二十七也此詩木下明庵の関を記す井白石の
批點あり、巻尾の白跋に無名が南海の虫を摹
しとおることや烏石の序を滕定福が書してある
といふ珠のあり、外に朝鮮人東野の葉に播磨
清絢の序あり、南海の白跋云々

此書余の時五心聊馳以試才思耳
在今後之不狂也必語者無或矣終欲
以之塵世亦不之怪又於以之覆酒甕者數
矣特以先生所命不忍棄以偶連連友
皆具勝劣珠玑但羞盈流轉世乃取是火

読者勿以一葉の爲る全身云

十一月十九日録

○花葉八冊寶曆年間雍南田元房の著す本
草木各四冊二百種の花を圖し各解説あり、
和本の本草に精細其に通る圖を刻し其書の恐ら
く此を初めとある、唯此枚早く焼けたる
ものなる、此書市中稀く、殊に草木の
二種描完備のむむし清雅し、價四十五圓と云
偶れありと云々

五山版の碧雲の扉、葵麩の輪廓左側二種
々の地名と考を刻し其書のあり好書家之ん
を珍とするものも云々愚るることあり、花葉

五山の校元を托し若干部数自家の書名を揮刻せしめたりあるべきや美を因取し、或るは一巻房に見学せし五山の版元を託し美を因取某寺と刻しあり、翻後蒲原某寺と刻せしもありと云ふ所ありし

○今津ハ一余が也既獲たり全刻は断る所ハ十餘枚ニ帖をえし和刻木板と為す余和刻木板あることをいふも、切らざる、更なる詳視せんハ原拓にありざるの物無キもあらず、今津不承の拓本を割奪して今津、始るもの左の一字也
満行元常

是生減法

濟南の某佛に托しと字を染めたりと云ふと云ふと比較せんハ墨を毛異らざるのみならず、余の帖の字劃の線筋も鮮にんこと、更なる物にハ継ぎ合はせたり紙一紙にあり、通例ハ一枚くの紙を用ひたり也 原拓の断る部数枚を得ることき、今津も一困難ありしが、此の四字二行装束と一帖とあるは、佛壇の四角の型を七張は、可なるん歎合伴の書状なりぬれぬ

十一月念

昨は例にまて ちまのを新
 朱筆を 全洲の 甚く字
 語 無 奉 無 驢
 同 仙 樂 齋
 長江の 蔵の 子の 聊
 有ん 招 法 甚 大 中 情 事
 の 夕 多 少 くに せ ぬ 粗 事 山 車
 其 あり 市 教 得 信 に 抄 情 南 山 車

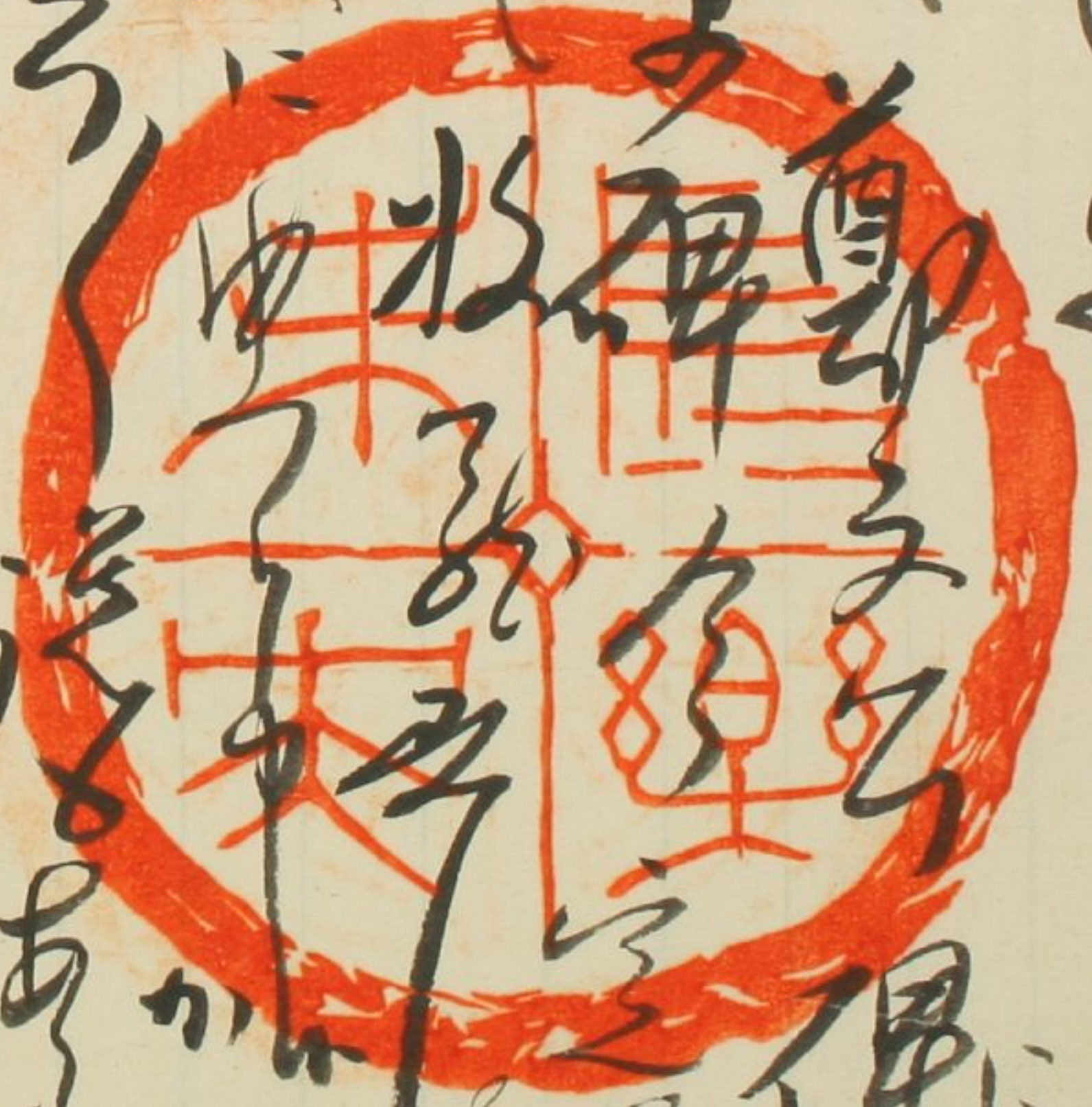
もの なる なる なる なる なる
 おろ なる なる なる なる なる
 和 用 あり あり あり あり あり
 する なる なる なる なる なる
 せし なる なる なる なる なる
 持 なる なる なる なる なる
 真 なる なる なる なる なる

新定... 和... 二... 得... 金剛... 終... 同... 一... の... 草... 子... たる...

長樂未央

樂瓦之二

錦雲製 静園桂



疑... 精... 物... 紫... 蔵... 補... 加...

自仙樂齋

蔵研



〇昨の大隈邸に文の協会の星君を呼びて
 榎有恒の「アムラス」を聴きし頃

味を感し、又ある白くゆるかに合せ、八十丸の産物を後
け、約数の心算より、既ぬし、さう、おと合を察し、ひさ
満ち、説法の妙を、こを、聴衆を驚く、拍子し、又感
歎の聲を、おとさう、棋を、余りの、仰む、人、を、未だ
荒年、さう、外遊中、おかく、高山に、登、棋を、し、登
山の、経路に、あ、あ、スウエツ、ラント、二、三年、満、在
の折、北、お、吃、立、す、アル、プ、ス、の、一、年、アイ、ゲ、ル、と
在、る、峻、絶、の、山、を、往、来、ア、ン、ペ、ニ、ス、ト、處、に、登、
攀、を、合、つ、ん、を、も、い、ま、の、成、ゆ、を、も、の、こ、ろ、く、登、山、中
余、を、強、む、もの、を、少、く、さ、す、利、處、北、峻、攀、一、を、攀、
得、る、もの、と、さ、う、さ、も、強、く、無、理、な、お、棋、も、
遊、る、難、と、冒、し、て、其、の、頂、を、極、め、る、時、に、お、

九月、や、は、あ、う、依、つ、て、北、え、に、棋、の、名、を、合、し、る、もの、を
る、棋、の、後、こ、よ、ん、に、北、山、と、スウエツ、ル、の、グ、リ、ン、テ、ル、ワ
ル、リ、村、ら、う、湖、望、め、は、湖、上、に、を、為、天、と、な、お、も、と、し、て、北
の、壁、の、こ、と、き、所、を、其、の、林、森、ら、う、登、る、もの、と、あ、ら、う、
迂、回、し、て、お、ら、あ、く、遠、し、て、更、に、此、峰、鋒、の、こ、と、し、て、吃、立
ある、最、高、攀、に、攀、を、る、もの、を、さ、う、さ、う、に、此、の、最、高、攀
の、半、に、位、を、む、を、登、り、た、る、もの、を、さ、う、さ、う、に、お、ら、あ、く、さ、う、さ、う、に、
上、登、る、能、い、お、ら、あ、く、其、若、合、々、互、立、し、て、切、配、を、
く、且、つ、是、の、托、き、に、所、を、さ、う、さ、う、に、人、力、の、不、可、能、に、
さ、う、さ、う、に、登、る、もの、を、切、論、智、力、を、要、す、
又、お、ら、あ、く、神、助、を、要、す、もの、を、切、論、さ、う、に、道、向、
一、人、乃、お、二、人、の、お、ら、あ、く、を、伴、ふ、を、例、と、す、さ、う、さ、う、に、彼、ハ

三人の熟練する案内人をはひり、彼らに導かせる山登攀の
経験より、是處をゆるぎなく登るの一種の釘を工夫し
たり、例へば釘の頭は輪を作り、堅牢なる杖の先
きにかぎを挿し、そのかぎを釘の輪はハ
ッパを力に登るの工夫をもち、又傾斜する
場所を、杖をもち傾斜架し、傾斜を作
り、その山登攀の工夫をもち、北東の山
を登るに、へりこむの工夫をもち、其の
工夫をもち、傾斜することをも、彼らに
せん、その工夫をもち、傾斜することをも、
し、堅牢の縄を身体を珠数おさへ、約する
例とす、この工夫は日本の慣例とす、お交す、日本の

登山者といふ、彼らの身体を連続し、約する、
一人に怪我ある、其の厄全部に及ぶの危険あり
と、其の工夫をもち、傾斜することをも、
大切なる条件と、一行の共同精神あり、又共同
動作あり、一縷の縄を、一連托生の通
路とす、勿論一人に怪我ある、其の累を蒙
ること無き、其の工夫をもち、傾斜することをも、
精神をけん、其の目的を達すること難し、況んや
怪我の起る、其の工夫をもち、傾斜することをも、
あり、其の工夫をもち、傾斜することをも、
先づ、其の工夫をもち、傾斜することをも、
物を求む、又釘を打ち、是處をゆるぎなく、

着せりよく仕務あり、中より一先顔のとも壁二
度より時二一回、連れを墜せし扱ひ繩の一端を
巖角着る釘より堅約するの仕務あり、其の
く違ひなき働きの数日を越ゆるも、其の
難し、僅ら三十分間程の時、視念をくするに
とあり、其の緊張の心あり、其の
想のふし、其の緊張の心あり、其の
の為人を、其の緊張の心あり、其の
ま似たり、三人の要あり、一人は
村の岩角の致多きところあり、其の
の理想を、其の緊張の心あり、其の

松を、其の緊張の心あり、其の
のあり、其の緊張の心あり、其の
あり、其の緊張の心あり、其の
えん、其の緊張の心あり、其の
内才二番目か、其の緊張の心あり、其の
細を下し、其の緊張の心あり、其の
六、

あつ、其の緊張の心あり、其の
山の頂を、其の緊張の心あり、其の
の、其の緊張の心あり、其の
得ぬ、其の緊張の心あり、其の
心と、其の緊張の心あり、其の

のよむべきもの、狂人的観念一種宗教的観念を
起さしめしむる六北の登山の事、少年の思ひ出と
笑をよみよみ身を犠牲にするこゝに近しい冒險
をよむといふ七おろしき事、此が、若い血が
湧いて人うやんぬるう自分かゝやると躍進する
七六人傳ひある、棋の登山と此の彼の二箇
単一なるものなりと向々する敬慕の傾聴せ
しめられぬ死法の方で得に觀たる人を
動する進するものもある、彼れを一種の人の頭
腦をみつる居るうしく、其の言ふべきを
的に且つ言ふは又新らしく味を帯び居
る文の場をもと登山の事ありといふ一巻を此

の指者寸の落る事とん試みつてあるが、棋の
あはれのりもよいまむと緒のつらぬ、西洋の
を先をよむるんき回むい浮いあるこの日本
の事よむい一巻七出版してあるい、自れも
年時と登山癖うあつてあるのの経路七あ
る、笑うる為り、棋の實驗する、特別に、回
感を採ふし、得るうこのり、十一月廿日録

○例の蒲北狂前回の傳ひ来たり、余、寸珍架中
の如くとも一巻の法書と賜ふ、此の伝と巻子と監
于一三合許一巻首の横三寸許の傳ひあり、銅版印刷
び、五行毎に少しの間隔傳ひのあり、折帖とする用と
といふ、自れ所傳の法書と伝は巻帖も似て居るが、出

の時五指を以つて岩の角をつゝえむく為り、指頭皆
感度を失ひつと、この五指を全身の力集注す、左七あ
つべきまゝ、尚ほ又直上の山へ夜をもすす、七とよりテ
二トを張るべきを多く、且つ横臥すべき傾斜の所
をく、これらと余程困つた様子で、溜りて身体を山に結
ばつて身を屈して寐るよりおほさうつとく、其
氣を防ぐより魔法瓶に熱したるスープを用意し
時りまんの暖を取つたと云ふが、日本の懐爐よりあ
つたまゝは何程役入立つたか、あつたと云ふは尚ほ模
とある鳥の山に登つた時入生の木爪三本をポケットに
入る山頼と喰つて快を乞ふに、其時同行の外人に本
を興つたのが、うまは惜しうつたと語つた、彼等も生の

木爪を食ふに喉を乾かすといふ、左も美味を感ぜ
ず、まんに三分一を食ひたつたを感ぜあつたと云ふ、
○浅草の山に遊園地をもち、千世見まゝ、二冊を持
参り、菊の培養法をうきまゝのものとして三冊の内末巻
に花と茶葉とを同くする、首部序を翻くぬ、若
者の名多めを、菊の年中行事と題す
る記もあつた、十一月に、菊の培養を録切、
改く所斯道に、あつたものあり、用く乗し寸餘
本、二年おし、七、物産中の架上げ、まゝと云ふ
十一月亦記す

此中の内、花開くもひか、全うする時
を、硫黄をあるとき、根を酒には一二粒を

種を別ちてあるところ、又肥料の内、鶏糞
魚の糞、魚の糞、鶏の糞を内、其の
湯と共につそのゆへに入つて、二、三、一、把、或は
把の核を入るるは、其の毛いつと
水もろると、其の北の肥料も、梅の前の、
くへしとろる

○昨の例のこと、園を市中、海、四五の旗を
得る、内、右の二書や、始りて、

花枝 深

或は新姑

山東京侍殿書

一冊

種々の物品を巧みに換物に見えたる中の
也、其の最、将基、信、蟬、蟬、(牛のゆき、) 田面
枕、首、腰、帯、人の顔、物子、帯、信、馬、錠
汗、水、石、は、り、の、類、こ、京、信、を、改、漢、の、名、を、以
つて、漢、世、信、界、に、確、視、し、と、ま、り、流、石、に、意、匠
去、毛、こ、式、立、三、馬、花、記、り

拾遺枕首紙花術抄 一冊

如本

閑閑也 上方版

教書にあり 清の納言の枕首紙
う、故、く、衣、な、り、と、ま、り、を、男、女、交、接、の

予を致し、
元簡潔なるものあり
此は軟本家の様と云ふも價十二圓也

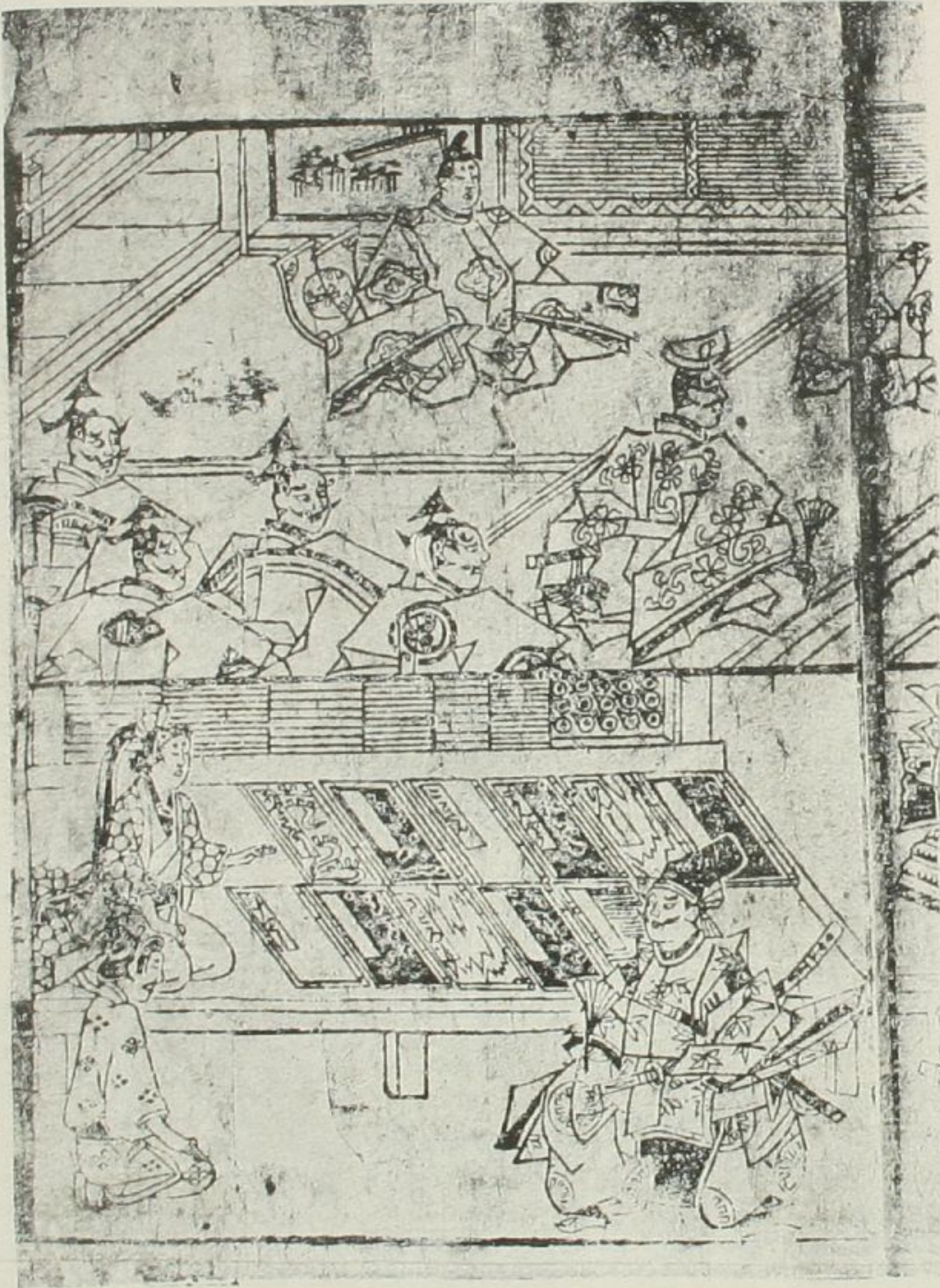
十一月廿三日記

○某日ち年画家より自合の寄を来たれり若の中へ一枚
の圓、
ある日本画家の地圓中、
名う呼ぶとある、
ぬりしある画家を
カのむらさきの、
拵張しある時代を畫し、
を其土地へ
拵張しある時代を畫し、
を其土地へ

を標する計種を入るる、
この圓を何派何派
と云ふところの、
其地の画家と別して、
若一圓して、
考の以て巻尾にぬりし

○大隈元侯未二入隠宅の庭に、
あり、
は葉を鳴く、
の右にの梅を、
後、大隈侯に、
こもる、
其の背面に、

(一其) 第十番忍季第四第仁八田四郎書物



延寶四年印本

天上異葩香露沾
 春風一動旭光進
 似聽山鳥呼
 若軍聲
 左近梅
 右近梅
 紫宸殿下托雲根
 常為君王眷賞恩
 歎之深哉雪後色
 恍然日月錦旗翻
 杉山全拜題

てつりりこれな... (Faded handwritten text)

板衛兵六屋本正訪堂御阪大

○方より感... 折板一二の... 心の... (Vertical handwritten text)

一 麒麟抄

六冊

北山本邦上代の... (Vertical handwritten text)

一 紙漁重寶記

寛政十年浪義出節

此紙を... (Vertical handwritten text)

盡す紙譜と併せて珍奇すべしとの事
と稀觀の也

一陳東橋墨譜 蘭譜 唐本 四冊

東橋の墨歌頗る風趣あり、石庵阮元江秀所、王守溫王文治等數十家の巻後冊に満つ。

外、
一鹿兒崎進討記 七冊

西南歐多の陸太政官日誌の体裁に倣ふて、新しき事あり、西の古海軍の編輯あり、往々圖を挿入す、而して七冊目より彩名入の題本中や

遊覧の圖あり、日本初頭の遊覧の体裁と云ふ、此の如し七冊を完結にせんとせん、或と云ふ新七冊に止まらざりや、又七思ひあると云ふ事をおうし味あり、此流衣に挿こむべく、架やリ、加くべきこととす。

一猫道人百猫譜 一冊

猫道人と云ふは、長谷川玄暁の事なり、其の又四十年の次、長谷川玄暁の行の傍、其遊覧をも出せり、これ遊覧の前後二冊に、かゝりて出せるものなり。

猫の圖を多く、牧や、其好むの家

表裏の

模刻し、紙の遊覧をぬか

特々物本一と云ふ者：左の序を深す

善縁者謂持子不持而視者謂不持見
然則不持見而以不持持子如何是
以
逆待考之也耳不持而見者其方

善縁者逆笑世道亦如毛耳

唐中月九日心出畫皆甚出於
乃猫謔之首以第一笑

三山行者 〇〇〇

三山行者と奥西抱生の印の二顆共相付
て持しあるを臥表を寫する也何
北の猫は百猫謔もち年時手入し
とこんと元んハ多んと湯生の感さき徳い

才家花中一福地梅庵う善娘のみの
縁名垣魯久：名冬四後の流和を
北の論評、其方の猫をこきと
張りしは、此の百猫謔と
婚の六條のり、

○茲村の遺稿中五條若干あり、皆瑕疵あり、五
光平に斧正を乞ふを初め、自らを笑ふ、政村文
こやうと云ふ心甚に稀に、鶏肋の感あり、
補遺の附載するに可なり、五光平の雄黄

左のめし

(十月廿九日)

補遺

醉後措雙眼閒居。一枝梅報春。箇中閒富貴。不識說與世早朝。辛。

其二

半生成底事。依然捫虱人。問吾夕不答。一笑卧青茵。午窓間。客來苦相。

呈總拙宗匠

曾見丹青妙。還知俳句工。奈何名總拙。風韻在斯中。

寄友人蟄龍

傲骨不求世。深藏淵底龍。惜君老陋巷。文墨日相從。

孤坐藥爐畔。病中作。詩酒却招病。蒼然顏色衰。如今無一事。彷彿老禪師。

廿七

○大隈侯の遺著「東西文の之油和」侯晩年一研
究立論する所、結論を作するも、利と侯の嘉し
るも遺恨を有する、侯を懐終り頃、念致せり
日を忘るる所、物と余に、**唯**出版を囑託
せり、**爾来**金子傳士を背定し、筆録を
従し、今漸やく印刷成る、去年一月、**内忌**と
を頒布せんとし、昨今余好むに、没頭するもの
侯の囑目、利人ことを、庶幾する身、此を侯
の苦心のこのまゝ多く流布の見込ありし
切せりと五千部と販布せり、**あ**るも、侯の苦
心、**節**を相漏るる感あり、**侯**の苦心の
未、**文**の協同一月刊行本に之れを充つることし

又早稲田大子其全部に、**五**千部を買上げし
めんことを果し、このうち五千部の内、二千部を
丈、見込立ちり、他の一半も、**書**道に伝ふ
取、**矣**し得人歟、**昨**今、**本**其他の、**十**月
も注ぎつてあり
○高須梅屋余、酒敵也、**時**の梅屋を推して下
谷練堀町、**壽**と稱する、**亭**に、**一**面す、**河**内山宗
全の遺地といふ、**家**屋、**楮**に古杖を用、**内**
に所置、**舊**屋の遺材を、**別**とす、**の**あま
あ、**小**室に、**對**坐を、**杯**を、**酒**漸
く、**既**す、**余**梅屋に、**今**の酒の、**任**歴を、**話**す、**こ**
十割、**別**に、**梅**屋、**傾**聴、**快**と、**呼**ぶ、**梅**屋

最々酒の任歴を果能後之載ふ余亦其の
聲之傳ふ也初更之判り酒具あるを其梅屋
の東道をも記し瑞の徳に伝ふ、牡蠣の全
飯を下物と又杯を存け十一時を過ぎ初めし西
途に就く、此を以て来無き所也
○此より出政をえん南洲書を高らし来ぬ
あつ癖心入ふ此を南洲清安が天智天皇の
勅問に奉答したるものなり南洲を推古天皇の
朝に高向玄理と隋に推び、西暦三十三年、西
来遣仕を許し主ら子弟の輩内、任し等と
いふ、本書は我文献の尤なるきとあり一よりその
久しく埋没し廿二紀とせん、此は江朝歟

後之の後時の忌禱に關し好之れを我花と
世に出さざりしとあり、其府公の如きもの
一説を印し終に果さいりしといふ、長年と
従のことき又之れをねらふ能くししと似たり、
此は我知府歴史蹟に日籍の關係等を載る
に極めし重要なものなり例の永樂大王碑の
全文並に釋文を収めたることと、珍とすべし
今右の内容目次を左に収むといふ

本書の校注者、権藤成卿、小澤打魚、西人也
巻尾に弘仁六年八月、從五位下丹後守大
中臣朝臣善守の跋あり、

○十一月廿九日、予に傳ふ、又國を過り、と、散葉

淡谷先生の遺著「桐子」此の本を讀むにやと聞くと
 何ぞやと云ふ、併に堆積の由り深山の桐子二冊
 一冊を得て之を此を創のレヤレ本式の教本
 として本家のやうなやうなやうな桐子此の人の
 皮肉と流石に穿ちあう久しく青いを知らぬ
 体レヤレ本を好まぬ目今之れを懸念するに
 如く世に桐子風味を主とせんとしむるに
 外に餘りあるやうなり

○形影相話二冊 杉田玄伯(鶴高)の遺著
 此は江戸幕侯の主人の老婦に對する侍し退
 屈のまじきくまのしや也、平生人無く唯
 此のやうなきに影あるに、その影をお手

南淵書開版ノ趣旨

本書ハ古碩儒南淵先生ガ中興ノ英主
 天智天皇ノ下問ニ奉答シタル我國最古ノ文献ナリ乃チ上世ヲ討ネテ出雲氏ノ衰頹 神
 祖ノ發祥ニ遡リ而メ我 皇家肇國ノ遺謨ヲ昭ニシ高麗百濟新羅諸邦ノ興廢存亡ヲ説テ
 大陸文物漸入ノ沿革ヲ審ニシ漢魏六朝ニ於ケル學術宗教ノ變遷ヲ論シテ社稷民人ノ推
 移ヲ明ニシ以テ當時我 皇室ノ式微セル所以國民ノ困憊セル所以ヲ一斷シ屹トシテ廓
 清ノ綱要ヲ示シ仁義禮學ヲ以テ治國ノ準繩トナシ大同ノ典謨ヲ正タセリ大化三年大同
 ノ聖詔ヲ拜スルニ至リシモノ一ニ此ニ源ツケリ
 傳ニ云フ南淵請安ハ
 推古天皇ノ朝高向玄理等ト隋ニ遊ヒ業成リテ歸リ經術ヲ以テ稱セラレ人皆南淵先生ト
 敬稱ス書百餘卷ヲ著ハセリト其書今世ニ傳ハラズ唯タ此南淵書三卷近江朝顛覆ノ時右

淡島を以ての... 朝... 新... の本... を... 何... と... 記... せ... る...

二

大臣中臣連金 皇子大友ニ殉シ刑ニ臨ムニ先チ之ヲ子孫ニ遺留セリ後弘仁中其苗裔丹
後守大中臣善守跋文ヲ附シ爾來制度家ノ秘典トシテ纔カニ之ヲ後世ニ傳ヘタリ故ニ學
者稀ニ其書名ヲ知り又ハ其殘缺二三篇ヲ窺フモノアリシモ竟ニ之ヲ公刊スルノ機ナカ
リシナリ、是レ大化ノ鴻謨吉野ノ虎爪ニ壞レ官司只タ強宗侵奪培克ヲ事トシ前王ノ道
ヲ講スルモノ罪妻孥ニ及ブノ恐レアリシニ由ラスンバアラズ而メ制度家ノ遺胤或ハ神
祇祭典ノ職ニ没スルニ非レハ儀式服飾ノ業ニ墮チ律令政刑ノ事ニ至リテハ天下僅ニ二
三家ヲ留ムルノミトナリ牽テ維新ノ後ニ及ヒ流亡散落其祖傳ノ口授殆ント絶ヘタリ頼
ニ

明治大帝 皇子大友ニ
弘文天皇ノ諡號ヲ捧ケ
天智天皇ノ遺統ヲ崇ヒ齊民ノ鴻旨ヲ五條ノ誓書ニ昭カニセラレ
今上陛下

皇太子殿下ト承ケテ之ヲ體セラレ玉ヒシカ爲ニ此書亦蠹腹ニ委セラレス一條公爵ハ傳
者歷代ノ危艱ト校註者權藤成卿小澤打魚兩氏積年ノ勤苦ト多トシ家祖鎌足公ノ緣由
ニ依リ上表ヲ具シテ其稿本ヲ我

皇太子殿下ニ上リ
中大兄皇子攝政ノ往昔ニ鑑ミ此ニ古ヲ以テ今ヲ付リ

殿下大作ノ初年ヲ祝セラレタリ仍テ某等公爵ノ許諾ヲ得本書ヲ寫真凸版ニ附シ之ヲ同
好諸家ニ頒布シ閱讀ノ便ニ供セン事ヲ圖レリ諸家本書ニ依リ我國史ノ疑訝ヲ氷釋シ
闕文ヲ稗補シ國民思想ノ根源典例制度ノ準繩民俗混化ノ推移及ヒ大陸交通ノ變遷ヲ知
リ我立國ノ本義ヲ解シ而メ現代ニ於ケル思想轉變ノ時代ニ應セハ眞ニ誤ナキニ庶幾カ
ラン殊ニ本書載スル所ノ高句麗古碑ノ完文ト其釋文ニ至リテハ日韓古代史ノ秘關ヲ打
開セルモノニシテ紛糾セル古紀ノ年次正ニ之ニ由リテ較訂セラル、ニ至ラム歟

三

大正十一年十月

皇太子殿下ノ御覽ニ付...

南淵書目次摘要

○卷上

鋤園第一

南淵先生ガ躬ヲ鋤ヲ執リテ後園ニ耕セルトキ中大兄皇子中臣鎌子ヲ伴ヒテ訪ツレ玉ヒ教ヲ乞ハレシ問答ヨリ卷首ヲ開ケリ

民初第二

太始時代ヨリ出雲朝ノ大體ヲ説ケリ

大業第三

神武天皇ノ發祥ハ出雲朝ヲ倒セル諸賊ノ討伐ヨリ始マレルヲ説ケリ

謨制第四

神武天皇肇國ノ謨制ヲ説キ我國祭政ノ基源ヲ標示セリ

西謨第五

西藩即チ我西部ノ屬領三韓ノ國性民情ヲ説ケリ

鴻荒第六

素盞鳴尊ノ韓地巡遊ニ始マリ語源ヲ論ジテ索豕、息慎、肅慎、皆衝串ノ省ニシテ之ヲ筑紫ト讀ミ來リシヲ説ケリ

一民第七

人類都テ其祖源ヲ一ニセルヲ説キ考證ヲ示シテ地理的ニ現今ノ「バミール」高原ヲ以テ人類祖源ノ地トナセル説ヲ千數百年前ニ確認セリ

名起第八

何姓第九

種德第十

讓國第十一

名起ヨリ讓國ニ至ル四章ハ濟羅三韓ノ起原、出雲氏系統ノ分脈、漢宣帝ノ五鳳甲子ノ歲我出雲ノ支族日子根氏ノ子新羅王ノ嗣トナリシコト、神武天皇ノ皇兄稻氷王德ヲ韓地ニ種ヘ玉ヒシコト、天日槍ノ歸化、日槍ノ子日多珂ガ我國ヨリ迎ヘラレテ新羅王統ヲ嗣キ皇靈天皇ノトキ我國ト漢トノ國交ヲ開ク爲ニ勤勞セシコト而メ此時ヨリ我國ノ文化大ニ開クルニ至リシ所以ヲ説ケリ彼ノ漢書中元二年ノ記載ト黒田侯爵家所藏ノ漢代ノ金印トヲ對照シ無慮二千年ノ史觀ヲ新ニヌルモノハ唯此文献アルノミ

九夷第十二

九夷ノ別ヲ説キ倭ノ東方ヲ指ス考證ヲ明ニセリ

師升第十三

孝元天皇ノ國使ヲ派遣セラレシハ東漢安帝ノトキナリシコトヲ説ケリ

官家第十四

卑彌呼ハ日御子ト讀ムベキ事、任那宮家ト任那名稱及ヒ太宰ノ事、開化

歸仁第十五

天皇伽羅ヲ援ケテ新羅ヲ伐タレシコトヲ説ケリ

夫らむとかなる因米に於ての事をもひしむる事

香葉第十六
魏使第十七
倭女第十八
止殉第十九
田道間守ノ魏ニ使セシ真相ヲ説キ我傳説ノ訛謬ヲ正シ、魏使ノ田道間等ト共ニ來朝セシコト、而メ魏志ノ難讀不解ノ地名人名ヲ明瞭ニ訓釋シ、河野ノ亂熊襲ノ叛暗ニ大陸ニ關係アリシ事ニ及ビ女装ノ日本武尊倭女王ノ名ニ訛セル事ヲ辨ジ殉死ノ我國ノ古例ニ非リシ事ヲ説ケリ

○卷中

立制第二十

皇朝立制ノ大綱ヲ説ケル重要ナル一章ニシテ成務天皇ノトキ國民自治ノ成文ヲ明示セラレタル所以ヲ述ベ所謂六府三事ヲ掲出シ教育ノ根源治安ノ基礎ヲ詳説セリ

尊卑第廿一

葛城兄彦ノ新羅派遣、舒弗郎干老ノ暴言、武内ノ征討、干老ノ慘殺、新羅王ノ降伏、干老ノ妻ノ復讐、兄彦ノ横死即チ神功皇后ノ新羅征伐トナリ任那官家ノ再興トナリシコトヲ説ケリ

兵權第廿二

大權第廿三
貢博第廿四

神功皇后初度ノ攝政、應神天皇ノ在位年數、神功ノ再攝政、之ヲ大陸ノ史實ニ參照シ國史ノ疑惑ヲ一掃シ、百濟高麗ノ入貢、王仁ノ來朝、皇子稚郎子ノ勇斷、文教ノ振興ヲ説キ而シテ當時ニ於ケル國際折衝ノ表裏ヲ詳説セリ

探篋第廿五

南淵先生推古天皇戊辰ノ歲隋ニ遊ヒ留學三十餘年舒明天皇庚子ノ歲ニ歸朝シ途次高麗ノ舊都ニ遊ヒ永樂太王碑ヲ筆寫シ來リタル全文ヲ掲出セリ現存碑面ノ拓本缺壞讀ムベカラサルモノヲ考據トセル諸家ノ史論應サニ之ニ依テ更訂セラル、ニ至ラン

釋文第廿六

釋文以下議和ニ至ル四章ハ碑文ノ説明ナリ曰ク高麗始祖ノ鄒牟ハ都慕又ハ出雲ト同音、夫餘、夫婁、烏夷及阿伯粟生伯者等ノ音義ヲ説キ鄒牟ヨリ永樂王ニ至ル十七世ノ傳統ヲ掲出シ而メ葛城襲津彥ノ苦節ト其宛枉ヲ詳説シ我軍高麗軍ヲ突破シ和ヲ議シ帶方ノ秦民百二十縣漢民十七縣ヲ舉

獨留第廿九

之ニ依テ更訂セラル、ニ至ラン

鈔本あるものなりと云ふは、此の書は、

議和 第卅

ケテ之ヲ日本ニ移シ學術工藝發達ノ素ヲ作リシハ實ニ畿津彦等ノ功ナリト論斷セリ

○卷下

- 高臺第卅一
- 求工第卅二
- 通吳第卅三

仁德天皇ノ戰後政略、官紀ノ振肅、冗費ノ創除、王仁ノ勤勞、吳織穴織ノ招致、鐵ノ貢獻、鐵貨ノ流通、人民ノ段富、通吳貿易ノ發達、宋梁史書ノ參照

- 有德第卅四
- 七賊第卅五
- 非一第卅六
- 興産第卅七
- 反掌第卅八

競利ノ弊、朝野ノ腐敗、七賊ノ並起、雄略天皇ノ八面誅伐ノ英斷百世ノ下貧官汚吏ノ心膽ヲ寒カラシメ恰モ雷霆一擊天地ヲ一洗スルノ觀アリシコトヲ詳述シ而シテ百濟王家再興ノ詰命アリシニ及ヒ天皇興産ノ叡旨國民富力増殖ノ實ヲ舉ケシヲ説ケリ

- 遣僧第卅九
- 儒墨第四十

寺院ノ建造葬式ノ儀飾遂ニ百濟ノ亡因ヲナセルヲ誠メ當時我國情モ亦頗ル其弊習ニ染ミ蘇我氏磐井氏其邸第寺院又ハ墳墓ノ建築ニ僭越ヲ極ムル

傳佛第四十一
無制第四十二
叛於第四十三
篤教第四十四

ニ至リシヲ難シ空禮虛儀ノ世道人心ニ大害アルヲ痛論シ儒墨道佛ニ出入シ獨創ノ見解ヲ下シ公正ナル制度ヲ設ケ利ヲ開キ弊ヲ除クノ必要ヲ説キ聖德太子ノ佛法尊崇ニ及ベリ

不糺第四十五
廓清第四十六

聖德太子弑虐ノ大罪ヲ糺サレサリシ事情ヲ説ケリ廓清ノ大目ヲ掲グ

十罪第四十七

蘇我入鹿ノ十大罪ヲ列舉シ一斷誅伐ヲ加フベキヲ説ケリ字々震動シ一讀人ヲシテ悚然タラシム

則天第四十八

大化新政ノ主眼タル大同ノ詔書ハ此ノ自然ヲ基礎トセル則天ノ一章ヨリ出テタリ制度家古來是ヲ以テ王道ノ極致トナスモノ良ニ所以アルナリ

人情第四十九

人情ハ聖人ノ田ナリ人情ヲ耕ストハ其教育ナリ其政治ナリ其民自ラ治メテ共ニ安ンジ自ラ勵シテ共ニ漸ミ以テ公同ノ福祉ヲ助ケ成スハ是レ自治ノ大則ニシテ大化制度ノ礎盤ナリ

針本あるものうらみなる 匠長の名をいかにあきらむる

夫らむとかなる因事にむこの事とむいひのりいひ

不言第五十 天地ノ大徳ヲ生ト云フ、生々自然ノ化四時ノ順ニ随フベキ人事ノ序次ヲ
説イテ本書ヲ收束セリ古來則天人情不言ノ三章ハ之ヲ聖賢ノ域ニ達セル
大文章トナシ南淵先生ヲ本邦ノ儒宗ト仰ク鴻的トナレリ

一 聖賢ノ道
二 聖賢ノ道
三 聖賢ノ道
四 聖賢ノ道
五 聖賢ノ道
六 聖賢ノ道
七 聖賢ノ道
八 聖賢ノ道
九 聖賢ノ道
十 聖賢ノ道
十一 聖賢ノ道
十二 聖賢ノ道
十三 聖賢ノ道
十四 聖賢ノ道
十五 聖賢ノ道
十六 聖賢ノ道
十七 聖賢ノ道
十八 聖賢ノ道
十九 聖賢ノ道
二十 聖賢ノ道

又問者す、此の由名ある所也、近漸に聞するは
七ののうが、語りあるは、一般世の事とす、ことごと
ある流石に老練の筆で、七ととを言ふは、七は
田舎にも抱えらん、と文化年を、花千の花を
を、官舎に、う、献し、う、う、と、白銀二十
枚の、物あり、う、ん、を、資り、と、此、と、刊行する
は、し、村田勤の、序、に、見、ゆ、美、法、流、石、二、冊、本
は、版、式、名、と、正、著、者、あり、大、家、か、き、う、け、近、来
長、こ、重、せ、ら、る、

○ 美法流石後風出記、一冊、近長年台教を奉る
進献する、と、傳、く、去、雪、風、出、記、と、美、心、行、記、古
鈔、本、ある、と、の、う、え、ん、を、近、長、の、書、物、あり、と、

こととあうらう、^心身く博古の士の偽造をせん、
九名其の偽造の時代を決し、^心終るを不^心おの
りあうること此の巻尾田村存意の跋
に記する所の如し、此の文化年中、^心田村存意の刊行
せらる、^心乃ち其の也、^心偽造と云ふ
地誌として、^心お南の價値あり、^心架中一六瀬く可
らぬす

土月史記

○蓮社秘古編一冊文化年間三縁山の様に係る、
吾ら泉南旭蓮社沙門辨察の編輯の可する所
本邦に於ける蓮社の方略此をえて知るべし、^心蓮
社を廬山に於ける淨土の一派也、^心我邦に於て此
の派を創むると後醍醐帝の時、^心澄田●上

ところ、^心乃ち泉州志に本朝廬山旭蓮社大
阿彌陀經寺後醍醐天皇勅諭云々ことあ
るにんらう、^心澄田と廬山に遊び業を多うけ
るものこそ、^心我淨土宗を稱ん、^心蓮社に属す
るものあり、^心善徳山のことと其一也、^心此出中子李
龍改書する所の社賢図系に記を載す(同
上記)

○複製をなすに彫刻中の、^心の歴代の江戸圖が
出来るといふを山田うおち来たつとのを見るも、^心
何れもよく出来た、^心筆彩もよく、^心施してある
の心、^心一層彫りのよ、^心あし、^心を、^心寛文の江戸
圖に比し、^心仔細と異同を考証し、^心その考証を

一枚是れは遠くよと注意し、因に木版彫刻に就
て一二の事と志す。一、木版家之模範的刀
と彫りたるすべし。二、扱ふ思ふ人々あり。三、
んが藝術とのあはれを先ん無神経のよむ
い、木版彫の糸のよむを先ん無神経のよむ
あはれを先ん無神経のよむ。四、無神経のよむ
字を全く閉じ、文字を模範的の終り彫るこ
と。五、ツライ業は、時々終りの刻に務む保美の
よむとあはれを先ん無神経のよむ。六、終りの
心ある刻は、刻の度々を先ん無神経のよむ。七、
しと彫りの刻は、刻の度々を先ん無神経のよむ。八、
こころを先ん無神経のよむ。九、高又版木の杖むき

模を良材とせざるは、模も何んじとせざるは、
るる單辨の純白の山模りよむとせざるは、
産地、刻を伊豆の海岸のうよむと云ふは、
シホボリと云ふは、海氣を木地や木質に
南の要事とせざるは、伊豆の伊豆の良
杖を出ぬとせざるは、そこを杖木とせざるは、
削つて二夜の刻をせざるは、杖木の杖木とせざるは、
たふし伊豆のシホボリとせざるは、先ん無神経のよむ
か彫るて法しんらうが無の、殊に模の杖に貴ぶ
のを刀痕ら軟うよむとせざるは、人物の軟
いよむつツクリし味は、味は、味は、味は、味は、
うよむし、味は、味は、味は、味は、味は、

うきをありけりやうかやうか多うりたりと云ふ織細の
 刀や押ひ出せたるを、要部は黄楊を以て入るゝその
 短所を補ふことと云ふ若し、この行のなんやむと一箇其
 しく行いしある、こしと油法あること、頑心あるか
 美と木品が連う法果として刀痕の油和を欠
 くの欠、ある、又黄楊と織細の刻、あると云ふけん
 と名柄はたげることときつツクリ志に軟く味を鉄
 くの欠、ある、若し、眼まをくくく、女もたつたが
 見所あり見えると互うは不測かの家や埋木細工
 があることと云ふは、たんのむきある (十二月一日録)
 ○古語に夫婦婚合をミトノ、マツバト云ふ、夫婦と
 ミト婚合とマツバト云ふ、マツバを時と云ふハトを生

まう、若しと夫婦の會をまふと云ひし、又整の
 字をセマイテ、目と訓あり、唐に天竺三十五年日
 本書紀の細注に、木蒲致者、是木羅、所資討三新
 羅、聖其四婦、而所生也とあるを元とし、枕の
 字にマツラの訓あり、夫婦寤るも、起りも、歎
 若しとマツ、マキ、るくと云ふハ、其る、枕を思ひし
 めれり、や、宇治拾遺物語を、枕を思ふ時、と云ふこと
 さく、差し合、味しことと云ふ、夫婦の合歎と云
 此時代生々の根之、云々、神を拜する前後合歎
 を忌あり、西都若家の佛説を、いふ、其るを神を
 家の心得たるふよ、神道の本意ある、我上代
 の記ある、云々、交接のるを者き云々、ある

所のいづれ、御くハ、惟天皇のまゝに春日、和珥、臣、
深目、女、童、世、君、を、朝、凡、一、夜、し、と、あ、る、を、帝、終、不、
七、物、部、の、大、連、に、聞、ひ、ま、あ、大、連、帝、に、聞、ひ、一、宵、或、回、喚、
を、帝、曰、く、七、回、大、連、曰、ハ、ラ、ミ、ヤ、ス、キ、者、ハ、禪、を、体、に、
瀧、ん、を、七、懐、服、り、洗、ん、や、終、宵、朝、七、物、部、玉、の、記、ハ、
あ、し、と、ま、ふ、こ、と、き、一、例、し、上、代、男、女、の、性、態、の、壯、を、
の、思、ひ、へ、し、

(十二月一日録)

の、前、の、膳、心、さ、う、杉、田、鶴、右、の、形、影、夜、後、を、比、次、後、
う、大、方、家、の、勢、を、論、す、言、平、近、く、と、さ、う、く、
え、お、か、し、ろ、く、感、ず、る、節、多、く、さ、い、一、の、お、給、七、出、
来、の、こ、ま、か、い、何、の、材、料、も、な、ら、ん、と、也、ハ、二、を、
海、お、く、

一、海、の、志、を、を、廢、す、ま、女、抱、ひ、方、の、意、を、用、也、
ふ、き、み、あ、り、あ、の、年、の、時、田、中、俊、彦、と、い、ふ、を、
臨、田、の、道、し、ま、女、人、の、曰、都、あ、ま、し、飯、田、の、其、来、を、
ま、ん、と、思、ひ、つ、羽、二、市、麻、ん、木、綿、麻、ん、と、い、
ふ、こ、と、ま、ま、を、用、あ、く、し、と、教、へ、し、こ、と、あ、り、
女、師、の、年、若、く、し、も、の、笑、し、き、は、く、ま、ま、過、せ、し、
が、先、に、從、ひ、ま、く、の、病、者、を、廢、す、ま、ま、及、こ、是、
深、さ、る、言、の、あ、ら、ま、を、切、れ、こ、是、ハ、昔、時、を、
か、女、人、々、の、ま、の、せ、と、性、業、の、強、弱、と、を、思、得、
し、其、程、々、を、あ、す、ま、や、う、ま、え、あ、り、し、と、の、
あ、ら、ま、と、見、お、ま、り、

一、人、の、ま、り、中、を、切、等、級、お、こ、ら、う、湯、化、カ、セ、マ、

さまさるることを後き阿茶茶陀の消化説も
卷々同く河茶茶の消化を以て其に説けり
其説を以てするは曰く

凡人飲食蓋有^二化^一 一曰^二初化^一 粗^二碓^一
二曰^二次化^一 烹煮^二熟爛^一 三曰^二口化^一 細嚼
緩送 四曰^二胃化^一 莖^二麦^一 傳送^二三^一 腹中
み^二入^一 胃^二熟^一 せ^二る^一 胃^二の^一 三^二化^一 せ^二し
と^二ら^一 二^二三^一

一 同く白くてもよく焼くもの白くとも雷の毛
の白くとも異也、カウラスと称すは
難んども七とく同物を以てし、病を治す
るに於て此れあり

一 四時を以て候出地の寒暖は従ひ人体も異
なりあり地を以て候方と異せざるの事
を説く候り不^二同^一 常^二に^一 白石先生の南島志
を讀し下^二薩州人^一曰^二本州の南^一 琉球^二四^一 在^二春
に罷り三年に一度交代を為すあり、其中
田^二酒^一を飲^二む^一を忌むるもあり、然るに
其人彼地^二に^一 在^二る^一 肉^二を^一 養^二と^一 泡^二盛^一 酒^二を^一
飲^二む^一 十^二数^一 鐘^二を^一 勤^二め^一 其^二の^一 名^二 何^一 せん
地^二の^一 内^二 大^一 島^二 の^一 名^二 何^一 せん 其^二 名^一
鐘^二の^一 名^二 何^一 せん 本^二の^一 名^二 何^一 せん 及^二ん^一 ば
其^二 名^一 何^二 せん 初^二の^一 名^二 何^一 せん 天地斯
人と生し方物各異と不^二同^一 たりと見え

のいつや尾めおきの地なりと潤しや某
家の世生の主の命を十玉杖の宮伝科
料金を要せしめしり（）を持ち、前もさく用を裁
りり、葉子を吐き出すと持ち出さるることを載
せるとに記し、此を世氣の利きとものり葉
子居に葉子を握りて其の家を宮伝科と傳りて
用を裁し、さす。雪伝おく行、さすし、あや
料金を活きさす也。こゝに似寄の伝、雪伝地
形影夜伝に載す

此の笑面をさると昔二人の大盗ありて手衣
の七賦を多くおとさす或る日春高連の止に
殊に妙に笑うし時美味を述べしなり

手下へ命し某の市某の店にぬきてある盜
や来んといへりや賊すて誰彼行きしに某寺
ありて盜み得する手をはりて物持ちとさす
かゝ一人の女賊ありて其盗を大盜伝に
向つて曰彼に必し盜み来りてしは、おとす大
るる由をいれ、説くを及ぶ、さしといひし、らるる
後、賊より、鮮魚を提げ来り、大盜伝に
其賊に心を彼伝より手前へさすし、説く
いと云いし、たさりとさすし、盗を
書きありて目指す、盜の盜又得んといひし
が、他をさす、腹外に盜み入り、さす
を捕ひ、其償を以て買来りといさす

袖の留りうゝを解らぬ一線を劃しては
 ますこゝろを心持のうゝの男を心と心つてのみ。又
 土の毛も一粒獨特の子ヅミか、ついに温氣の毛
 威儀を帯びた柳のむび、極細から斑紋を
 くりしをみる。飾りもや圓案を南東を飾るを
 くりし。さうして井別りのつきこゝろある。似
 と居る。守業の飾を云ひてみるのを倒れし
 ころさあまむさう日本物方の飾である

十二月四日録

○明暦版の江戸田を花さる人あり。借きり後表
 今もと物目前も霞利をくさるもの漸々
 くなる。大ききと盛一様より物うかるといふ

版原本と毛髪(通)の毛、茶彩をもかくらう、
 明暦三年に海風日本橋二百太印在事つの出版
 七、此の回の珍とよきを意々時代の古きさの
 ころか、此版出た二三月の後江戸は稀々の
 大火あり、或人と全市島有に悔し、雨後の江戸
 の街街大いなる夏するものあり。寛文あるの地
 図を雨つと物四一、異国をある時を
 ころころと興味あり

十二月五

○家内之元と器(平形)の冊子を婚めて観法す
 南柯の夢を著し、銀鏡の著し、一種料理板
 南ともふ心とものうゝも、著道(の料理)と著
 ころころ花洒家の侍り法法と柔道著し

を題とすもの。得たるを廿三夜待て
て奥女中一の内着帯を摘むるしおの
（味あるもの）。

十二月廿九日

の十二月九日、漢方志、圖志を造る得るもの十種
由二三と記す、

一 智囊

十四冊

此書未架ありたりし、亦未架あり七架中
ニ納りしと記す、此書得るべきは、官版也
官版の辨既言ふ事、七さうく且つ此書

の版木、午を収めず、此書も略し不
以也。

一 喜多武内粉本

一冊

小南時六十枚許の冊子、文政十年丁
亥歲縮圖の造りあり、時代見えて
冊子種々古画の描きあり、外部風
俗化程傳中の風俗人の風俗を写
しあり、各紙彩書あり

一 北条の道志趣

一冊

文久二年壬辰春の、上版二條、枕を
形とし、事海島二十三驛を例の
書きしも、各驛のカラーを描き

北条山形中北条権

一 横濱的細圖

一冊

一 那兒所あるの細圖

一冊

北二出共ニ安政六年の刷行ニ傳る即ち
開港南年也此身の横濱圖大小あり
得るも小形本あり、貿易の細圖
と横濱形回五枚のものも、各下の
高家の名を記し、そのを記す、おのづ
ら地圖の説めを記するものあり、地圖
ニ附帶ニ七休便利を記す

一 吉原大鑑

初編 二冊

豊花子著文海五年の刊吉原の全書

を比較し、おのづら、横濱、吉原を収め、今も
珍なりとも、好む家に、吉原、一巻也
架守、既ニ吉原大全あり、之を併せ
置くとへし

一 早麦胸板

一冊

式三馬の戦也北条の持巻也
そのへきき、吉原の傍の中央を断裁
し、早麦、既ニ得る物ありし、之を裁
せば、四面全くと、早麦するの故向あり
例ハ、歡樂の圖上郡あり、下部ニ
説的の文あり、そのを上ニ裁せば、福
蔵の圖とあること、山形の傍を圖し

等一紙面片掛物とて貼付しあるもの
を賞玩する茶坊主下部の画しある
その掛物と上、魏を成下に茶坊主を
と嘆き悪口をうし居る回あること也
此の執向より、此の執向玩具の
継々あるも冊子中此の執向を及用
し等と恐らく此の及用を

一 百人一首和歌始末抄 一冊

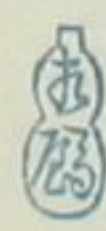
天正七年山東京侍の長也也、
政談落款の自書あり、百人一首
の和歌を滑秋の注釋しあるもの也
各歌の前には名前の系譜を載せり

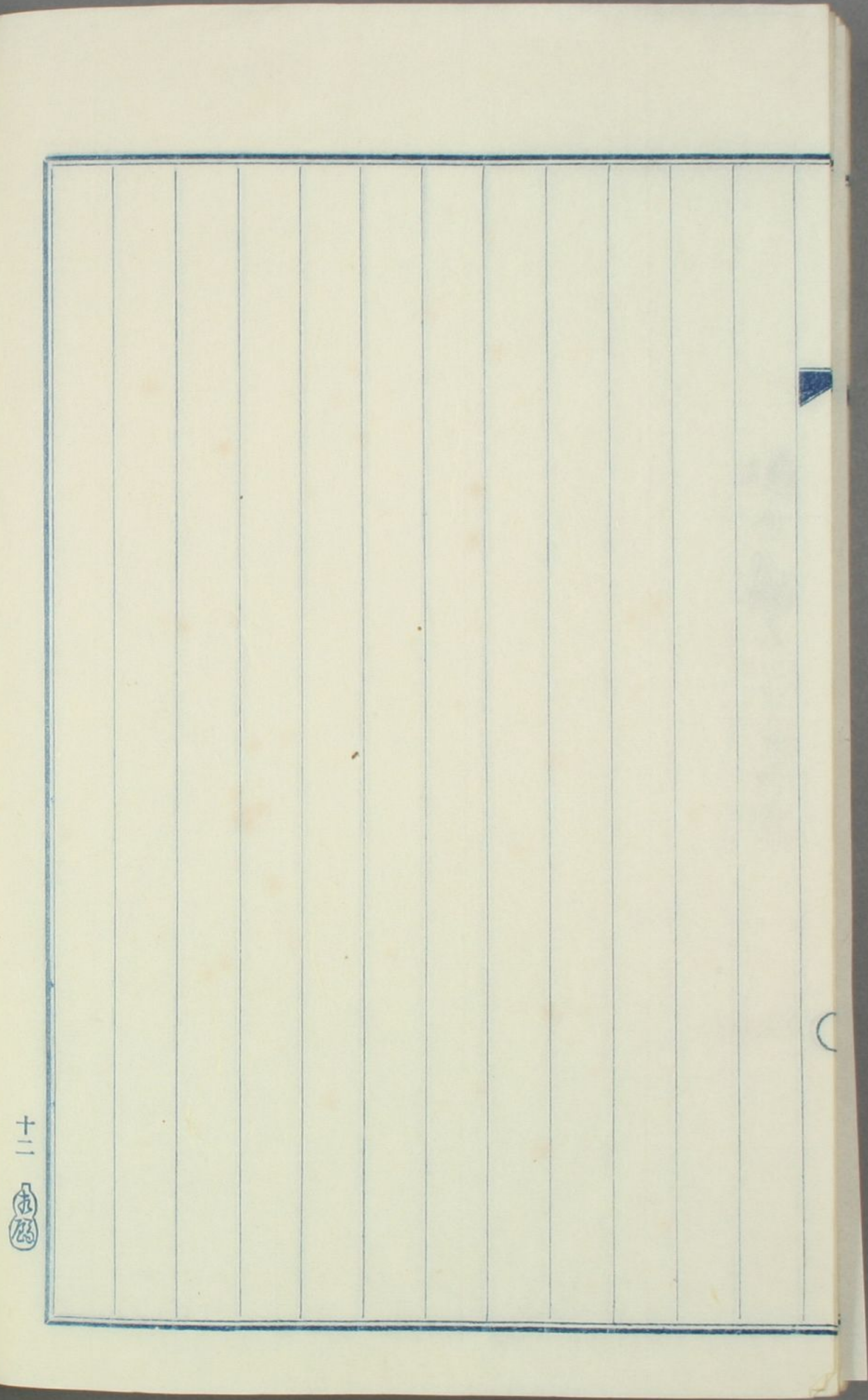
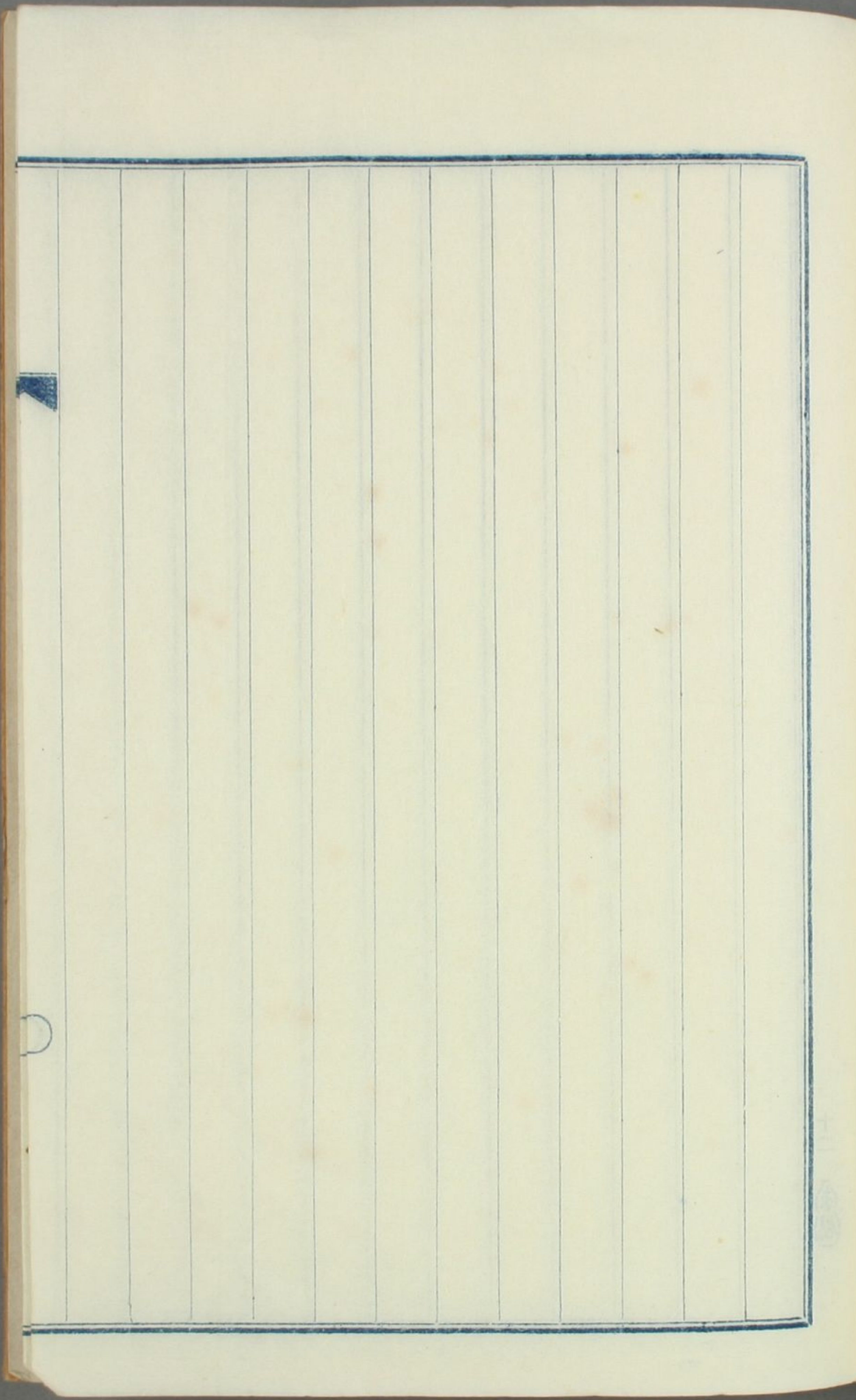
：先の滑秋をとり、教頭頭の注を
論を引用する是又滑秋が多、律
中にて不ヲラシガ本州を引きたる不
リ、ヲラシガヲラシ滑秋を弄す

一 江戸風流 二冊

四代唐市の書しる代田城三十一
付の光回を畫ししもの前代唐市
の江戸土產の繪を向と名るべき也
版と最大正四年の繪とあるも
よ各見付の風流の年を逐て
し此の旧時の名流を収するも
教頭あり、徳川家世録あり

併也親子(2022)





十二
五
四

以下全て
白紙

